４００グレインの重さ

2syoku

『４００グレインの重さ』　　作：二色

――この世界はまるで悪意でできているかのようだ。そんな世界に守る価値などあるのだろうか？

「はぁ、はぁ、はぁ……」
　呼吸の音がうるさい。そもそもなぜ僕は息を切らしているのだろう。
「はぁ、はぁ、はぁ……」
　なぜ僕は……血まみれなのだろう。
「はぁ……はぁ……は、ははは……あはははははは！」
　そしてなぜ僕は、笑っているのだろう。

　強くなりたかった。
　僕は確かに、強くなりたかった。
　けど、それは、こんなものだったのか？
　違う。違うのに。
　違うのに……。

　１

「くそっ、ペダルが重い……」
　外壁の近くにある、最寄駅までの砂利道を自転車で疾走する。が、メンテナンスをしていなかったツケが自転車には直結してしまう。
　タイヤの空気は抜けてるし、ギアはさび付いている。「一之瀬恭」と書かれた学生カバンを乗せた前カゴはガタガタだ。そのメンテ不足の自転車を駐輪場に置く。それからはダッシュで勝負。だが、駅構内に入ってもホームに着くまでは油断できない。
　駅構内を全速力で走る。
「もっと鍛えとくんだった……カバンが重い。脚が痛い」
　さっきと同じようなことを思わず言ってしまう。だが、自転車にしても僕の体にしても結局は自業自得だ。「たられば」は全く役に立たない。それでもこの時間ならギリギリ電車に間に合う……はずだった。
　改札に定期を通して、駅のホームに向かう。僕の「街」にある唯一の駅。あまり大きくはないけど、駅の中に小さな雑貨店が一軒だけはある。

　ホームに向かう、その途中で駅員ともめてるおじさんやおばさんがいた。
……嫌な予感がした。
「もしかして、アレか……？」
　祈るような気持ちで電光掲示板を見ると、そこに流れる文章は死の宣告と同等のものだった。
〈ただいま、アーリの線路内進入により、ダイヤが大幅に乱れております〉
「やっぱり。ああ、遅刻確定だ……」
　もう走る意味は無い。僕は足を止め、力なくうなだれた。
　この時期は化け物、怪物、モンスター、まぁどれでもいいのだけれど、の〈アーリ〉の一種、グリズが多くなる。グリズは、熊が元になったとされているアーリ。
　わりかし人里に近いところに住んでいる割には、とても危険な存在。そんなところばかり普通の熊に似ているのに、大きさや凶暴性は桁違い。だからその危険度も数倍。
　体長は二メートル半を簡単に超えるし、その腕の力と鋭く硬い長い爪は人間の体を一振りでただの肉塊に変えてしまう。
「この前も襲撃にあったばかりなのに……最近特に多いな」
　先月の新聞の一面を飾った事件。大きめのグリズが列車を襲撃し、たった一体で何十人もの死者を出した。地元では不安から自衛用の武器が売り切れるほどだった。
　そんな事を言っても仕方が無いのは分かっているし、乗った電車が襲われなくてよかったと思うのも悔しいけど事実だ。そして……もし襲われたら僕は戦えるのだろうか？
　そっと、右腰のホルスターに収まっているアーリに対する護身用の銃……Ｓ＆ＷのＭ５００に手を置いた。
　父さんの形見――本当は生きてるのかもしれないけど、とにかくそういうことになっている――の銃。
　現在市販されている中では世界最強の威力の弾丸を使う、リボルバー式拳銃。その威力は５．５６ｍｍのライフル弾の倍近くもある。最早拳銃としてはオーバースペックだ。
「まぁ、どうせあまり撃つものじゃないけどさ」
　ホルスターの中のステンレスの銃身はピカピカだ。自転車と違い、こっちの手入れはほぼ毎日行っている。ホルスターから銃を抜く。重たいシリンダーを振り出して、きちんと装弾されているかを確かめる。この銃専用のとてつもなく大きな弾薬が五発、しっかりと収まっていた。
　シリンダーを元に戻し、銃をホルスターに再び挿す。僕は背中を伸ばし、大空を仰いだ。
「……いい天気。空が青いなぁ」
　時間を潰す手段が無いときは空を見るに限ると思う。変わり者扱いされるけど、僕は空を見るのが大好きだ。朝焼け、夕焼け。青い空、曇り空。雨が降っているのもいいし、雪の日の落ちてきそうな重い空も大好きだ。変な趣味かもしれないけど、空を見ているとあっという間に時間が過ぎていく。
　空はどこまでも続いていく。どんな人の上にも、どんな場所の上にも。そう。僕は結局、この世界が好きなんだと思う。
　僕の世界なんてちっぽけなものだ。家と学校がほとんどの狭い世界。しかも、化け物もいる。

それでも、この世界が僕は好きなんだ。

　城壁の門が開いた。アーリを避けるために僕達の街には高い城壁がある。その門の内、比較的小さめのが列車用の出入り口だ。それが開き、列車が草原へと出ると、重たく分厚い門は静かに、しかししっかりと閉まった。
　昼過ぎになってようやく列車は再開した車内はガラガラだった。隣街からの通学だとこういう時に困る。だがしかし一高校生である僕が簡単に引越しなんて出来るはずも無い。高校に行かないという選択肢もあったのだが、僕はなんとなくで学業を選んだ。
　窓ガラスに映る黒髪に黒い瞳の男子はため息をついた。改めて自分の姿を見て、髪が伸びてきたのに気付く。
「そろそろ切ろうかな？」
　切る理由はふたつ。うっとうしいのが少々。女の子みたいな扱いをされるのが嫌なのが大半。女の子みたいなきれいな顔だね、という、クラスメートをはじめ女子達によく言われる言葉。それは僕にとっては褒め言葉にならない。むしろコンプレックスだ。
　なにしろ僕の身長は普通女性より少し大きいぐらいしかない。さらに童顔で女顔。華奢な体型でもある。学ランをブレザーに着替えたら女子の列に混ざっても分からないかもしれない。……もちろん混ざりたくはないけど。
「これ以上考えるの止めておこう……」
　僕はガラス越しに列車の外の風景を眺める。緑の溢れる平野が広がる。だが、そこはアーリの巣でもある。――そう、動物をスケールアップしたような化け物。それがアーリだ。
　１７年前突如出現したそいつらは、発見と同時に圧倒的な凶暴性と攻撃性を携えて人間に襲いかかってきた。その手によって人類の数は激減した。
　コミュニティは分断され、今では「街」と呼ばれる小さな集落に転々と居住者がいるだけだ。街は城壁なり軍隊なりが守ってくれているが、その外はあまりにも危険だ。また、街の中も絶対の安全ではない。極端な話、城壁が破られればアーリは入ってくる。
　空は比較的安全なのだが、ヘリコプター等は燃料の精製の関係で全くといっていいほど使われない。ガソリンやジェット燃料は貴重品扱いだ。なので、僕達の移動手段はもっぱら石炭を使う「列車」だ。
　アーリの襲撃後もなんとか線路は生きていたので、列車に乗って僕達は街を行き来する。電気を使わないから、なんとかそれくらいなら動かせる。燃料も無限ではないが、電気よりは手に入りやすい。それに、送電線を狙われる心配も無い。
　もちろん問題はある。正直この列車は実は危ない。というのも、たまにだがアーリに襲われるのだ。勿論警備員さんはいるし、車掌さんも武装をしている。けれど、それだけでは万全じゃない。そもそも、アーリが「目立つように煙を上げながら餌が沢山詰まった動くコンテナ」を襲わないほうがおかしい。そうなると、民間人も戦えないと困る。結局周りに誰も居ないときに頼りになるのは自分だけだからだ。よって、僕達は武器の所有が認められている。一番多いのは銃器だけど、刃物だったり爆薬だったりする人も居る。とにかくそこは自由だ。そして何かあれば

それを使って身を守る。つまりは僕の場合はこの銃が最後の生命線なのだ。だからメンテナンスも欠かさない。本当は自転車もしたほうがいいのだろうけど。
「だけど、列車の遅延は遅刻の理由に認められないのは辛いよな……」
　揺られる列車の中、立ち尽くしながら再びため息をつく。車内の連結用のドアが開く音がした。別に珍しいことじゃないので、僕は視線を向けることさえしなかった。外の景色を眺めていると足音が僕の後ろを通り過ぎようとして……止まった。
「あの……一之瀬君ですか？」
「え？」
　振り向くと、そこにはクラスメートである高遠さんがいた。目立つタイプではないけれど、綺麗というか可愛い顔立ちをしていて、艶やかな黒い長い髪はきらきらと光るよう。そしてその髪には、桜を模した可愛らしいヘアピンがしてある。実は彼女は男子の間では密かに人気がある女の子だ。最近、なぜかよく列車の中で会う。……偶然なのだろうか。
「やっぱりそうだった。一之瀬君も遅刻ですか？」
　学校ででよく見る、控えめな笑顔で彼女は尋ねた。
「そうだね。アーリのせいとはいえ、単位平気かな……」
「うーん。もしかしたら私も危ないかもしれません」
　二人して苦笑する。
　本当は高遠さんはかなり成績優秀だから、単位の心配なんてないだろう。嘘をついているのは分かっている。だけど、僕のために話を合わせてくれているのだろうと思うと、なんとなく焦った気持ちが和らいだ。
「ところで、一之瀬君は座らないんですか？　座席、空いてますよ」
「え、ああ、そうだね」
　断るのも悪いと思い、僕は空いていた席の真ん中に座る。高遠さんはその隣に座ってきた。それもごく自然に、当たり前のように。ふわ、と女の子特有の甘い香りがして、なんとなく狼狽してしまう。それを感じ取ったのかもしれない。
「すいません、その、隣、嫌でしたか？」
　大きな黒い瞳に覗かれる。
「い、嫌じゃないよ。全然」
「そうですか。よかった」
　よかった、の意味を考えようとしたが冷静な思考が出来ないのでやめることにした。
「そういえば一之瀬君、いつも大きな銃持ってますよね。こんな大きな銃、撃てるんですか？」
　僕の隣の高遠さんが腰の銃を見てそう言った。
「ああ、コレ……確かに強力なんだけど、撃てるかって言うと……」
　強力ということはメリットに直結しない。つまりデメリットも多い。例えば前に撃った時には、衝撃で肩が外れるかと思ったぐらいの衝撃があった。
「実はコレ、父さんの形見なんだ。半分お守りみたいなものかな」
　もう何回も聞かれた質問。それの回答も決まっている。

「あ、そうだったんですか……ごめんなさい」
　高遠さんはまずいことを聞いてしまったと思ったのだろうか。それきり黙ってしまった。
「大丈夫。謝らなくていいよ。父さんのこと、全然覚えてないし……」
　車内に流れる気まずい空気。それを破ったのは高遠さんだった。
「あ、あの。私、銃を護身用に両親から渡されたんですけど、ほとんど撃ってなくて。今度教えてくれませんか？」
「ああ、いいよ。僕でよければ」
　高遠さんの顔がぱっと明るくなった。
「そ、それじゃあ、よろしくお願いします！」
　ぺこり、と頭を下げる高遠さん。そのしぐさがかわいらしい。
「いえいえ。ちょうど住んでる街も一緒だしね」
　僕がそう言うと高遠さんは顔を上げた。
「えーと……まず、いいですか？　一応説明書は読んだんですけど、それ、私の銃とは大分違いますよね。スライドとかどこにあるんですか？」
　スライド。オートマチックの銃はそこを引くことによって弾丸を装填する。
「ああ。多分高遠さんのはオートマチックなんだよ。僕のはリボルバーだから」
　オートとリボルバーの違いは多い。簡単には説明できないくらいだ。
「へぇ、それはリボルバーって言うんですか。ちょっと持ってみてもいいですか？」
　目を輝かせる高遠さん。それはそうだろう。この銃は珍しい部類に入るからだ。
「別にいいけど、凄く重いよ。大丈夫？」
「大丈夫です。多分……ですけど」
　少し不安だったが、僕は腰から銃を引き抜き、それを彼女に渡した。
「お、重い……」
　僕の銃を高遠さんは両手でなんとか支えている。それはそうだろう。この銃は２キロ以上もあるのだ。僕だって正直手に余る。
「気をつけてね。それ、安全装置無いから」
「え？　危なくないんですか？」
　そうか。今までほとんど銃を握ったことの無いんだ。知らなくても当然だ。
「まぁ、基本的に構造上リボルバーの大半は無いよ。たまにロックキーがあるのもあるけど」
　ロックキーは基本的に家に置いておく時などに安全のためにかける鍵だ。手間がかかるし、瞬時に解錠できないので普通は使用しない。
「そうなんですか？　私ももっと勉強しなくちゃ……」
　小さくガッツポーズをする高遠さんを見て僕は苦笑する。
「別にそんな焦らなくていいんじゃないかな」
「あ、はい……」
　また俯く高遠さん。それきり会話は終わり、僕たちは暫く黙ったまま列車に揺られていた。

２

　学校のある街まであと五分とかからない場所。突然爆音と同時に列車に大きな衝撃が走った。何か大きなものにぶつかったような、そんな感じで。
車内が揺れて高遠さんの体が浮く。
「危ない！」
　反射的に彼女を必死で抱き寄せて、自分の背中が床に打ち付けられるように体勢を変えた。
「ぐっ！」
　高遠さんを抱えているため受身を取ることが出来ず、僕の背中に鋭い痛みがはしる。
「一之瀬君！」
　立ち上がり、不安そうな顔をする高遠さん。
「う……かはっ……」
　背中を強く打ちつけたので、息を吸うことすら苦しい。だが、ゆっくり休んでる暇はない。何かあったんだ。背中を押さえながら立ち上がる。
「大丈夫……それより、何が――」
『お客様にお伝えします！　現在グリズが三体、線路……ぁぁぁ！』
　絶叫の後、ぶつ、と音を立てアナウンスが止まった。
「……マズい。三体だって？」
　一体でも列車が止まってしまうくらいなのに、本来群れないグリズが三体も……。だけど、僕に出来ることなんて。
　直後、タタタ、とライフルの連射音が聞こえた。高遠さんが身を強張らせる。車内を見回すと、乗客はお年寄りが数名に、子供が二人。後は僕と高遠さん。皆怯えきっていて、泣き喚く声が響く。動けそうなのは僕らだけだった。そして、少しでも戦力になるのは……。
　僕はため息をついた。英雄になるつもりはない。柄じゃない。消去法だ。
「高遠さんはここで待ってて。様子を見てくる」
「一之瀬君、危ないです！」
　僕の制服の裾を高遠さんが掴む。
「大丈夫。一応、男としてやるべきことはやっとかないと」
　高遠さんの手を振り切り、僕は列車の窓を拳銃のグリップで思いっきり殴りつけた、ガラスの割れる派手な音に乗客がますます身を固めるが、それを気にしている場合じゃない。僕はそこから車外へ飛び出した。
　背中は痛むけど、なんとか動ける。線路上に出ると、僕は右手のＭ５００を見た。
「頼むぞ……」
　その時、絶え間なく聞こえていたライフルの音が途切れた。嫌な予感が頭をよぎる。
急ごう。僕に何が出来るかは分からないけど、放っておいちゃいけない。もう、「あんなの」は嫌なんだ。
　それが僕の初陣……いや、二回目の戦いのはじまりだった。

３

　横倒しになった列車。その前の車両を目指して僕は走った。
「う……！」
　先頭車両に到着した。したのだが、その現場に愕然としてしまう。警備員さんが二十人以上、ズタズタになっていた。何人かは腹部が引き裂かれていて、あたり一面ひどい臭いがする。車掌さんも一人が血だまりの中に倒れていて、もう一人の車掌さんは軍正式採用アサルトライフル……Ｍ４を必死にグリズに向けていた。しかし。
「弾が出ない！　弾が出ない！　弾が出ない！」
　おそらくはもう弾切れだろう。パニックを起こしながら銃口をアーリに向けているだけだ。銃口の先、グリズは一体がほぼ無傷で生き残っていた。かろうじて三発ほどの銃創が見える。他の二体はピクリとも動かない。その残ったグリズは仲間を殺された怒りなのか、撃たれた痛みなのか、地響きがするくらいの咆哮をあげている。
　悪夢のような光景。記憶が一瞬フラッシュバックする。頭を振り、それをかき消す。違うんだ。僕はもう違うんだ。あの頃の僕とは違うんだ！
「車掌さん！　逃げてください！」
　だが、その声は咆哮にかき消され、錯乱している車掌さんには届かない。
「くそっ！」
　僕は車掌さんの元に駆け寄り、肩を揺さぶる。
「弾が！　弾が！」
「落ち着いて！　運転室に予備の銃があるはずです！　持ってきてください！」
　その言葉に虚ろだった目が光を取り戻した。
「あ、あ……は、はい！」
　彼は頷くと、ふらふらと、それでも走りながら車内に戻った。
「さて、と」
　車掌さんはいなくなった。つまり、グリズの眼光の先には僕だけが映っていることになる。そう。狩りの対象。
　化物はじりじりと距離を詰めてくる、僕も後ろ足で下がる。列車の中にはお年寄りや子供ばかりしかいなかった。車両が襲われたらひとたまりもない……高遠さんも、おそらく殺される。
　決めたんだろ。もう逃げないって。僕は自分にそう言い聞かせる。
　腰のＭ５００に手を伸ばした。世界最強の拳銃。抜き撃ちなんて自信はない。だけど、今の僕に武器はこれだけ。……僕は、強くなれたのだろうか。強くなれるのだろうか。そう思いながら、皮製のホルスターから銃を抜き、アーリに向ける。明確な戦闘の意思を感じ取ったのか、グリズは僕に向かって突進してきた。間合いは６メートル弱。シングルアクションの方が撃ちやすい。僕は激鉄を起こし、引き金をゆっくりと絞るように引いた。
　爆音と同時に、普通の拳銃の弾のレベルではない量の火薬が炸裂し、重い弾頭を飛ばす。発砲

の反動で僕の両手は麻痺し、両腕が真上に跳ね上げられる。その衝撃でさっき打ちつけた背中の痛みが倍返しになって襲いかかる。
「ガァァァァッ！」
　苦痛の叫びと共に、狂ったように暴れるグリズ。眉間を狙ったつもりだったが、弾は肩口に当たったらしい。そこから血が噴き出している。それでも十分な威力はあるが、倒すまでには至らない。
「……マズいな」
　僕の両手は痺れて暫く使い物にならないだろう。二発目を撃てないのに、一撃で仕留められなかった代償は大きい。
「死ぬの、かな……」
　傷の復讐を果たそうと、ゆっくりと近付いてくる怪物。死にたくない。死にたくない。死にたくない！
　そう思っても体が動かない。恐怖心と先ほどぶつけたところの痛みで力が入らなくて、その場にへたり込むことしかできなかった。アーリの形をして迫ってくる死から逃れるすべは無い。
いや、無いはずだった。
「一之瀬君！」
　叫び声と共に軽い破裂音が響く。後ろを見ると、高遠さんが小型の自動拳銃、ワルサーＰＰＫを構えていた。手つきは相当危なっかしい。しかも撃った弾は明後日の方向へ飛んでしまった。元々護身用の銃だし、訓練もあまりしていないのだろう。いや、そんなことよりも……。
「高遠さん！　なんでここに！」
「一之瀬君、逃げて！」
　グリズは高遠さんを睨む。あれは新しい獲物を見つけた目だ。彼女の細い体は極度の恐怖と緊張で震えている。彼女も食われてしまうのだろうか。そんなの……最悪だ。もっと僕に力があったら。もっと僕が上手く銃を使えてたら。もっと僕が……。
　その時だった。
――強くなりたいか？
　誰かの声が聞こえた気がした。
――死にたくないだろ？
　目の前が暗くなっていく。
――じゃあ、その体少し「俺」に貸してくれよ。
　そして僕の意識は闇へと落ちていった。それからは、夢を見ているようだった。
　僕が僕を見ている。いや、あれは僕じゃない。「俺」だ。姿かたちこそ僕だけど、目の色が血のような真紅に染まっている。「俺」は片手で銃を三発立て続けに撃って、先ほど弾の当たった左肩以外の四肢……右肩、右足、左足に正確に命中させた。
　苦痛に呻きながら動けなくなるアーリ。そこに小型のサブマシンガン、ＭＰ５Ｋを持った車掌さんが来た。
「貸せよ！」

車掌さんからＭＰ５Ｋを奪い取った「俺」は素早く弾丸を装填すると、それを急所を外してフルオートで撃ち続けた。「俺」が笑っている。何が楽しいんだ。こんなの、単なる殺戮だ！　血まみれになっていくグリズに声を失う高遠さん。そして「俺」は、最後のとどめにと、眉間にＭ５００を向け、引き金を絞った。
　爆音と断末魔が響く。絶命する怪物を見て「俺」はただ笑うだけ。
「楽しいなぁ！　戦いは楽しい！　あははは！　あはははははははは！」
　狂ってる。いや、狂ってるのは、僕なのか？　それとも、「俺」？
　思考が歪み、そしてまた闇が支配する。今度は完全に、僕は暗闇に包まれた。

　４

　光。眩しい。
　僕は目を開けた。無機質な白い天井が見える。大きなランプが煌々と部屋を照らす。
「……学校の保健室？」
　起き上がると上半身が裸で、包帯が巻かれているのが分かった。
「痛ッ！」
　背中がまだ痛い。動くと痛くなるみたいだ。
「あ、起きたの？」
「委員長……」
「大遅刻ね。一之瀬恭」
　嫌味とも憐憫ともつかぬ口調で言う、クラス委員長、神月礼。赤いフレームの眼鏡のその奥。涼しい視線は真っ直ぐに、問い詰めるように僕を見ていた。顔は整っているのに、その視線と合理的過ぎる性格のせいで男女共にあまり評判はよくない。
「ごめん。でも委員長、今日の遅刻はノーカンでお願いできないかな？　色々あったんだよ。本当に」
　というか、満身創痍のこの姿を見ていながら、遅刻のペナルティまで与える気なのか。与えるかもしれない。委員長なら。しかし。
「いいわよ」
　普段の彼女はどこへやら、あっさりと彼女は言い放った。セミロングの少し茶色がかった髪をかきあげながら。
「学校公認だからね。今回は大目に見るわ。高遠美野里も無傷だったし」
　高遠。その言葉に淀んでいた思考が澄んでいく。
「そうだ、高遠さんは！」
「今は病院で検査中」
　いつも通りに無感情に言葉を返す委員長。
「な……！　無傷だったなら、なんで！」
　大声を出すとまた傷が痛んだ。

「いたっ……！」
　そんな僕を委員長は冷静に見ている。
「保健室では静かにしなさい、一之瀬恭。……彼女はなにやらショックを受けたみたいね。精神的なものを」
　精神的なショック。
「それはアーリのせいで？」
「さぁ？　そこまでは知らないわ」
　彼女はやれやれとばかりにため息をついた。
「暫く休んだら、家に帰って病院へ行きなさい。貴方の街の中央病院に高遠美野里もいるはずよ」
　言い終わるなり委員長は踵を返して、保健室から出て行った。
「高遠さんが……大丈夫かな」
　いや、まず自分が助かったのが信じられない。もしかしてあれは夢だったのではないだろうか？恐怖で失神して、倒れて、結局アーリは他の人が倒してくれていた……そんなものではないのだろうか？
「いや、だとしたら……」
　確かめる術を思いついた。ベッドの横のサイドボードに置いてある銃が収まったホルスターに手を伸ばした。銃を引き抜きシリンダーを振り出す。
「……やっぱり、夢じゃない」
　そこに残っていたのは五発の空薬莢だった。

　５

　暫く休んだ後、僕は学校を出て駅へと向かった。列車のダイヤは乱れていたが、幸いなことになんとか運転はしていた。定期で改札を通り列車に乗る。ついさっきアーリがが出たせいか、警備が増えている。これなら何かあっても僕の出番はなさそうだ。……まぁ、弾丸が無い今、できることもないのだけど。
　列車に揺られていると、途中、事件の現場の片付けをしている人たちが見えた。迷彩服なので、恐らく軍属だろう。青いビニールシートをかぶせてグリズの死体を片付けていた。
「僕がやったんだよな……」
　今更ながら実感する。自分がアーリを倒したのだと。だが、同時に思うのだった。
「本当にあれは僕だったのかな？」
　正直よく覚えていないのだ。気付いたら学校の保健室だったのだから。
「でも、夢でもなかった」
　五発もの空薬莢を僕は確認した。普段だったら一日に一発撃てばギブアップだ。
「あれは……なんなんだろう」
ぐるぐると思考が回る。そうやって物思いにふけっていたら、あっという間に街に着いた。列車

を降り、僕はホームを飛び出し、そのまま病院に向かった。
「高遠さん、大丈夫かな……」
　病院までは駅から徒歩十分。そう遠くは無い。僕は走った。傷は痛んだけど、少しでも早く高遠さんの無事を確かめるために。
駅までの道は思ったより長く感じられた。やはり体を鍛えておくべきだったと思う。なんとか病院の前に着いたときには、息も絶え絶えで汗だくだった。
「すいません、今日運ばれた高遠美野里さんの病室は分かりますか？　友人の一之瀬と申します」
　受付で尋ねる。この病院は結構広い。一室ごとに探していては日が暮れる。
「お友達の方ですか？　５０６号室ですよ。ただ、あまり長話はしないでくださいね」
「分かりました。ありがとうございます」
　僕は礼を言うとエレベーターに向かった。
「……ここか」
　５０６号室。ネームプレートには「高遠」と書いてある。
　僕は控えめにノックした。
「はい。どうぞ」
　高遠さんの声が聞こえた。とりあえず無事だということが分かって安堵する。ドアノブに手をかけスライドさせると、個室のベッドの上に高遠さんがいた。彼女は僕を見ると眼を丸くした。
「高遠さん、よかった」
　僕がそう言いかけたとき。
「一之瀬君……」
　搾り出すような声が聞こえた。
「え？」
「一之瀬君、今日の一之瀬君はおかしかった。……怖いよ……」
「そんな、あれは……」
　僕から目をそらし、高遠さんは窓の外を見た。
「助けてくれてありがとう……でも、ゴメン、今は一人にしておいて……」
　声が震えていた。
「あ、うん……そ、そうだね……分かった」
　僕はそのまま、病室を後にした。だが、真っ直ぐ帰る気にはなれなかった。
「高遠さんはどうなったんですか？」
何か聞けるかもしれないとナースステーションを訪ねた。
「申し訳ありませんがご家族以外の方には……」
「大切な友達なんです！　お願いします！」
　僕は必死に頭を下げた。何度も、何度も。
「君が一之瀬君ですね……顔を上げてください」
　聞こえた声は野太い男性のものだった。驚いて体を起こすと、そこには軍の警務隊の人が立っ

ていた。迷彩服ではないが、腕章で分かる。
大抵の街には警察は存在せず、軍がそれを兼ねている。僕の街もそうだ。
「彼女は、ショック状態にあります」
「ショック？」
「まずアーリに襲われたということ。次に命の危機にあったこと。そして……あまりにも惨い殺し方をした君に」
「惨い殺し方……」
　四肢を撃ち、無抵抗なグリズをマシンガンで穴だらけにして、とどめをさした。
「信じてもらえないでしょうけど、殺したのは僕じゃないんです！」
「では、どなただと？」
　冷静なその言葉が突き刺さる。
「それは……」
　軍人はひとつ息をついた。
「体の傷はそれほどではありませんが、心の傷は分かりかねます。今の彼女は、非常にもろくなっている」
「そんな……」
「申し訳ありませんが、少しの間、コンタクトを取らないようにお願いします」
雨が降っていた。僕は一人家路を急ぐ。
「僕は……僕は、ただ助けたかっただけ……」
　記憶がフラッシュバックする。あんな光景をもう見たくないから、僕は銃を取ったのに。
土砂降りの雨が体の芯まで凍えさせる。いっそこのまま心まで凍ってしまいたい。腰の大きな銃を抜いた。
「僕がこいつをもっと上手く扱えれば、あんな声に耳を傾けずに済んだ……」
　それは無理だろう。僕の体格ではたかがしれている。雨は僕の傷にもしみ込む。痛い。とても痛い。体が痛い、頭が痛い……胸が痛い。
「帰って、寝よう……」
　ふらふらと僕は自宅への道を歩いた。
「僕は？　あの声は……？」
　返事は当然返ってこない。ただ、うるさいくらいに雨の音だけが聞こえた。

　6

「ただいま」
「おかえりなさ……恭、どうしたのその傷！　それに、びしょぬれじゃない！」
　台所から顔を出した母さんの表情が青くなる。どうやら学校から母さんに連絡はなかったらしい。
「うん。ちょっとお風呂、入ってくる」

　荷物を床に置いた。ホルスターも外す。
「あ、恭！」
　僕の背中に声をかける母さんをわざと無視した。服を脱いで制服はハンガーにかけ、シャツ等は脱衣カゴに放り込む。
シャワーを浴びると、傷口に染み込んで痛い。湯船につかる気分にはなれなかった。
「僕はどうなったんだ……？　どうなるんだ？」
　風呂から上がると、脱衣所に洗濯されたパジャマがあった。母さんが置いてくれたのだろう。僕は着替えると、居間へと向かった。母さんが難しい顔をして、俯きながら椅子に座っていた。
「恭、体は大丈夫？」
　心ここにあらず、といった口調だった。
「それは大丈夫。……母さん、聞きたいことがあるんだ」
「何かしら？」
　テーブルの向かい側に座る。机の上にはホルスターに入ったＭ５００があった。
「母さん。僕は……上手く言えないけど、なにかおかしくなったんだ。アーリに襲われそうになった時僕が僕じゃなくなった気がする。何か知ってる……？」
　少し、少しだけ、母さんの表情が変わった……気がした。だが、それも一瞬。
「知らないわ。アーリに襲われたのね？」
　いつもの母さんの口調に戻る。なんとなく不信感を抱いた。
「……そうだよ。列車の途中でグリズに襲われた」
「そう……なの」
　母さんはまた俯いた。
「でも、無事でよかった……怪我も大したことがなくて……」
　瞳からは涙が溢れていた。
「あの人みたいにならなくて、本当に……」
　そう、僕の父さんはアーリの襲撃にあい、行方不明になった……らしい。僕が母さんのお腹にいる時の出来事だった。
「心配かけてごめん。……助かったのはこの銃のおかげかな」
　僕は机の上の銃に眼を向けた。
「きっと、父さんが守ってくれたんだ。そんな気がする」
　僕はあえて「俺」のことは伏せておいた。
「そう、ね……そうよね……」
　母さんは目を腫らしながら何度も頷いた。
「……安心したら、お腹減っちゃった。今日の夕ご飯は何？」
「あ。そうだったわね。今すぐ準備するわね」
　母さんはリビングと繋がっている台所に向かう。時計の針は六時半を指していた。まだ少し時間はあるだろう。僕は自室に向かった。階段を上がって二階の突き当たり。部屋の中には僕の服が干されていた。母さんがやってくれたのだろう。

　自分の机へと向かい、鍵のかかった引き出しを開ける。大きめの紙箱があった。それを取り出し、五つ、Ｍ５００の弾丸を抜き取った。ホルスターから銃を抜き取り、銃のシリンダーを振り出して、空薬莢を排出する。撃ち終えた空薬莢はまだ再利用できるので、専用のケースに入れて、新しい弾丸を装填する。一発、二発……そして、五発目を入れると、僕はシリンダーを戻し、再びホルスターに銃を挿した。
「僕もこれを使いこなせれば……」
　そんなこと言っても今更でしかない。くだらない考えを首を振って消し、僕は部屋を出て、階段を下りた。

　7

　次の日の学校に、僕はいつもの様に登校した。母さんには少し休むように言われたが、家に居ても腐ってしまいそうだったからだ。
　腰には新しい弾薬を装填したＭ５００を挿す。今日は列車の遅延も無く、普通に教室に向かった。流石にもうトラブルはごめんだった。僕は普通に過ごしたい。昨日の事を嘘だと思いたい。……なのに、教室のドアを開けると、クラスメートに囲まれた。
「な、何？」
　僕が呆気にとられていると、すぐそばの女生徒が高い声をあげた。
「一之瀬君、アーリを一人で倒したの？」
「いや、まぁ、最後の一匹だけだけど、一応」
「そのケガはその時のか。やるじゃん！　腰のその銃、ちゃんと撃てるんだな！」
　友人の声。
「まぁ、撃てるは撃てるよ……」
　撃つだけだったら引き金を引く力があれば誰でもできるのだけど。
「すげぇ！」
「すごい！」
　歓声があがる。別に凄くないのだが。結局その後ホームルームが始まるまで、僕はクラスメートに質問攻めにされた。だけど、僕はそれよりも高遠さんが気になっていた。彼女の席は空席だった。
　次の日も。また次の日も、高遠さんは来ない。
　だんだん傷は癒えていって。クラスメートの羨望の目も薄くなってきて。でも、僕は。
高遠さんがいないことに、寂しさと悲しみを覚えた。
「何をつまらない顔してるの？　一之瀬恭」
　そんな僕に声をかけた女子がいた。
「委員長か……別に」
　僕はあらぬ方向を向き興味なさげに言った。
「ご挨拶ね。せっかく聞いてあげようと思ったのに」

彼女はそういうと僕の隣の机に腰掛けた。机の本来の主は留守だけど……いいのだろうか。
「で、高遠美野里と何があったの？」
いきなりだった。いきなりすぎる。でも、当たっている。
「な、なんで高遠さんの事が？」
委員長は意地悪く笑った。
「カマかけたら当たっただけ。分かりやすすぎね。一之瀬恭」
「委員長、趣味悪いね……」
彼女は不敵に微笑んだ。本当に趣味が悪い。
「高遠美野里のこと、好きなの？」
「へ……いや、それは」
突然の問いにしどろもどろになってしまう。可愛いとは思うけど、好き……なんだろうか。
「好きなのね？」
「ち、違う……と思う」
委員長は体を乗り出して僕の顔に自分のそれを近づける。
「私に、乗り換えてみない？」
「うえ？」
思わず、変な声が出た。
「私なら、いつも一緒に居てあげれるわ。遅刻も見逃してあげる。どう？」
「そ、それは……」
遅刻がなくなるのはありがたい。それに……今更だけど、委員長はかなりの美人だ。
「ねぇ、どうかな？」
身を寄せてきて、上目で僕を見る委員長。近づいた体からは甘い花のような香りがする。
「え、えと。そもそも、乗り換えるも何も僕は……」
ますますわたわたしてしまう。
「なんてね」
しかし、そう言うと委員長はいきなり体を離した。
「……え？」
呆けた顔をした僕を、委員長がいつもの笑みで見下ろす。
「冗談に決まってるじゃない。そもそも異性不純交遊は厳禁」
「あ、あのねぇ……」
僕は反論する気力も無くなった。
「まぁ、貴方が落ち込んでても仕方ないし、少し休んだら？」
そう言うと委員長は自分の席へとスタスタと向かってしまった。
「……なんだかなぁ」
もしかしたら委員長は気を使ってくれたのかもしれない。彼女なりのやり方で。
「それにしたって、もうちょっと方法があると思うけどさ……」
たしかに少し気が晴れたけど。

　その日の授業も普通に終わり、帰りの列車の中。あの場所に近付くと今も思い出す。アーリは色んなものを壊した。形のあるものだけでなく、無いものも。二次災害だって少なくない。
そう、僕の日常や、高遠さんの心も……。
「ただいま」
　家に帰ると、ドアには鍵がかかっていた。
「母さん、また留守か」
　あの日以来、母さんは家を留守にする事が多くなった。どこに行ってるかは知らないし、聞かない。聞きたくないし、喋りたくないだろうからだ。
「もう一人の僕……」
　鍵を開けて、階段を上り、自室に入る。あれは僕であって、僕でない。でも、紛れも無く僕でもある。僕の体を使うのだから。
「なんだか、分からないことばかりだ……」
　僕はベッドに倒れこむ。そしていつしか、眠りに落ちてしまった。

　８

――よぉ。
　暗闇の中、僕がいた。いや、僕じゃない。「俺」がいた。
「……君は誰だ」
――何言ってるんだ。俺はお前だよ。
　そう。「俺」は僕そっくりだ。ただひとつ、真っ赤な瞳を除けば。
「違う。僕はあんなことはしない」
――あんなこと？　ああ、グリズのことか？　気持ちよかったよなぁ。殺すの
「あんなに苦しませなくてもよかったはずだ！」
　知らず知らず怒声になった。
――いいじゃねぇか。どうせ殺すんならさ。
「良くない！　そのせいで高遠さんが傷ついたんだぞ！」
――あれ？　あの女、お前のだったのか？　まぁ、悪く無かったよな。顔も胸も。
　へらへらと笑う「俺」。どこまで僕を怒らせるんだ！
「黙れ！」
――まぁ待てよ。大体、俺が居なけりゃ皆死んでたんだぜ？
「なっ……！」
　言い返せなかった。事実だったからだ。
――いいじゃねぇか。時々でいいから俺に体貸してくれよ。代わりに守ってやるからさ。俺も、体が無くなるの嫌だしな。
「嫌だ！」
――じゃあお前、戦えるのか？

「俺」の声が真剣になる。
「戦う……戦ってみせる！　お前なんかに頼らなくても、僕は戦ってやる！」
――ふーん。まぁ、気が向いたら泣きついてこいよ。いつでも助けてやるぜ。
　そういうと「俺」は背を向け、暗闇の更に奥へと歩いていって……そして、闇に溶けるように消えていった。
「……はっ！」
　暗闇の中うっすらと僕の部屋の天井が見えた。
「夢、か？」
　枕もとの時計は月明かりに照らされて、午前三時二十四分を指しているのが分かる。
「こんなに寝てたのか……」
　体中汗だくで気持ち悪い。そして、お腹も減っている。
「……なんか台所にあるかな」
　階段を下りていくと、リビングにランプがついているのに気付いた。消し忘れ、だろうか。そっと中を覗いてみると、母さんが受話器を手に怒鳴っていた。電話は貴重な電力を使うのでめったに使わないし、普段は温厚な優しい母さんがこんなになるなんて。だから、余計に気になって、僕はリビングに入るのを躊躇った。いや、躊躇ってしまった。
「なんであの子が……恭が、あんなことに！」
　あんなこと……？
「あの子も、いずれ」
　その次の言葉を、僕は聞いてしまった。
「あの子もいずれ、アーリに？」
　アーリ。モンスター。化け物。僕がアーリに？
「あの子に言わなくちゃ……でも、言えるわけない……！」
　僕はきびすを返し、静かに自室に戻った。静まり返った部屋。僕はベッドまで歩くと、倒れこんだ。
「僕が化け物に？　まさか、そんな……」
　そこで思い出した。真っ赤な目の、「俺」のことを。
「もしかして……」
　頭の中をぐるぐると思考が渦巻き、全てを飲み込む大渦となる。
「僕は……僕は、一体なんなんだ？」
　結局その日は一睡も出来なかった。

　9

　次の日の学校。僕は眠い目をこすりながら、努めて普通を装って登校した。
「おっす。おはよ」
　いつもの友人達が声をかけてくる。僕もいつも通りに返事を返す。

「ああ、おはよう」
　教室のドアを開けると、そこには高遠さんがいた。一瞬驚いた。だけど……。
「高遠、さん……」
　一目で分かる。彼女は、憔悴しきっていた。恐らく学校に来るだけで大仕事だったのだろう。
「僕のせいだ……」
　言葉は誰の耳にも入らなかった。
　お互いに干渉しないように一日が過ぎていく。昼休みも彼女はどこかへ一人で行ってしまった。
「……はぁ」
　思わず出てきたため息。
「一之瀬、最近なんか疲れてるんじゃね？」
　クラスメートにそう言われてしまった。
「ああ、ちょっとね……」
「それより、早く食べないと伸びるぞ、麺」
　僕は学食で好物の肉うどんを注文した。いつもはもっと安いメニューで済ますのだが、今は少しぐらい美味しいものを食べないとやってられない。
「そうだね。いただくよ」
　割り箸を使い、麺をすする。やっぱりここの肉うどんは美味しい。僕は夢中で食べていた。肉に箸をのばそうとしたその時だった。いきなり耳障りな音が響いた。これは緊急用のベルの音だ。
　生徒だらけの学食がざわめく。ブツ、と校内放送のマイクが入る音がした。
「生徒の皆さん、避難してください！　至急、体育館に集合するように！　それが出来ない場合は、近くの教室に隠れるように！」
「なんだ……何が起こったんだ？」
　生徒達が騒ぎ出した。直感的に、混乱の中僕は自分のカバンの中を漁る。皮製のホルスターに入ったＭ５００を取り出すと、僕は腰にそれを巻いた。
「何やってんだよ一之瀬！　よく分からないけど、逃げようぜ！」
　手を引っ張る友人。僕はその手を払いのけた。
「大丈夫！　先に行ってて！」
「あ、おい！」
体育館へと向かう生徒の波を逆走して階段を上る。上の階に行くほど生徒数が少なくなっていく。四階の端の一年一組。ガラガラになった教室に入り、窓の外を見た。
「くそっ……やっぱり！」
　この学校は街の端のほうにある。アーリの襲撃以前に元からあった学校をそのまま使っているからで、門が見えるくらいだ。
　その門は無残にも粉砕されていた。周りには警備員や軍人の死体が見える。そして……超大型のアーリ……ラーナがこちらへ向かって来るのが見えた。

　ラーナはライオンとハイエナを足して２で割ったようなアーリ。通常の大きさは３メートルあたりだが、そいつはそれよりも大きい。４メートルはあるかもしれない。四足なので高さは無いが、その動きは素早い。とにかく、グリズなんか目じゃないくらいのアーリだ。そいつが校舎内に入ってくるのが見えた。あの入り口からは……。
「保健室が近い！」
　保健室には風邪やケガで動けない生徒も多いだろう。保険医さんは女性だし、高遠さんだってあそこに！　だけど……！
「僕が行って、どうにかなるのか……？」
　僕が行ったところで、何も出来ないかもしれない。死体が一個増えるだけかもしれない。
頭を振って、腰の銃に手を伸ばす。ひんやりとしたステンレスの感触が、僕を落ち着かせる。
「……行こう」
　僕は階段を駆け下り、保健室へと向かった。
一階の奥まったところに保健室はある。本能的に「弱っている餌」の場所を嗅ぎつけたのだろうか、ラーナはまさにそこに向かっていた。僕は銃を抜くと、ラーナに照準を向けた。
　後ろを向いているから頭部は狙えない。注意を引かせないといけない。
「こっちだ！」
　僕が大声で叫ぶと同時に、ラーナがこちらを向く。チャンスは一度。振り向いたその頭に、僕は銃を向け、引き金を引く。落ちたハンマーは銃弾の雷管を叩き、火薬が発火した。ものすごい発射音と、反動が僕の体を襲う。
　でも、命中したはずだ！
　しかし、ラーナは俊敏な無駄のない動きで体を移動させ、弾丸をかわした。
「な……！」
　軋む両腕。また撃つのには時間がかかる。新しい獲物を見つけたラーナは、僕に迫る。
「くそ……結局、こうなるのか……」
　バカな男子生徒の死体がひとつ、増えるだけ。それで終わり。いや、終わりのはずだった。
――あーあ。だらしねぇなぁ。
　脳内に突如響く、それは紛れも無く「俺」の声。
――代わってやるよ。俺にまかせなって。あんなん雑魚だろ。
「うるさい！」
――あ？
「お前みたいのに体をのっとられるくらいなら……死んだ方がマシだ！」
――そうかよ。
「僕は、お前にも、アーリにも負けない！」
――はん。後悔しても知らねぇぜ。じゃあな。
　向かってくる相手を睨み付ける。銃を構えなおした。両手はまだ痺れている。でも、僕にはこれしかない。
「腕が千切れるまで撃ってやる……！」

ラーナが飛びかかってきた。勝負は一瞬だ。
大きな口をあけて僕に噛み付こうとする。僕はその口へ向かって銃口を向け、そして引き金を絞った。爆音と共に発射される弾丸はラーナの口内から入り脳を貫通し、噴出す血液は辺りを赤に染めた。力を失って倒れこむラーナ。しかし、勢いづいた体は止まらず、そのまま床を滑る。すんでのところで僕は横に転がって死体を避けた。
……終わった。アーリを、僕が自力で倒した。
見ると、僕の銃は撃った反動で手を抜け、床に転がっていた。僕はそれを拾い、ホルスターに収める。すると、一気に気が抜けたのか、体から力が抜け床へ座り込んでしまった。しかし、不思議と心は躍っていた。
「やった。やったぞ！」
「一之瀬君……」
声が聞こえた。間違いない。高遠さんの声だ。彼女が、助かったんだ。
「高遠さん、僕、やったよ。なんとか僕の力で……僕の力だけでアーリを倒せた」
振り返り、僕は笑った。力ない笑みだったかもしれないけど、それでも。立ち尽くす高遠さん。だが、僕を見る目は、病院で見た怯えたそれではなかった。
「今更だけど、この前はゴメンね。怖いところ見せてーー」
「……一之瀬君！」
ふわ、と高遠さんが僕に抱きついた。
「え、えええええ？」
戸惑う僕に、高遠さんは続けた。
「ごめんなさい。この前も、今も、助けてもらったのに……あんなこと言っちゃって……ごめんなさい！」
僕に抱きついて泣きじゃくる高遠さん。僕は、背中を軽く撫でた。
「大丈夫。僕はもう、あんな風にはならないよ……きっと」
「うん……」
僕達は暫くそうしていた。高遠さんの……女の子の体は思ったよりもずっと小さくて、華奢で。震えている肩を離したくなくなった。ずっとそうしていたかった。いや、そうしてしまおうか……。
「あー……お取り込み中すみませんが」
低い声が聞こえて、僕達はすぐに真っ赤になって体を離した。僕の後ろには背の高い迷彩の軍服を着た男の人が立っていた。顔には苦笑いを浮かべている。
「このアーリはどなたが倒したんですか？」
「え、まぁ、僕がなんとか……」
軍人さんが少し驚いた……と思う。ヘルメットのせいで表情があまり分からないけど。
「貴方が、ですか？」
「はい。一応……これで」
僕はホルスターの中の銃を軽く叩いた。

「凄いですね。ですが危険ですよ。とりあえず名前をお聞きしていいですか？　その後、体育館まで護衛します」
　軍人さんは沢山ポケットのついたベストの肩口からメモ帳とペンを取り出した。
「名前……一之瀬恭です」
「一之瀬恭……一之瀬？　恭？」
「そうですけど？」
　繰り返すほど変な名前だろうか、と思っていると軍人さんは声を潜めて笑った。
「……俺だ。覚えてないのか？」
「え？」
　その人は目深に被った軍用ヘルメットを脱いだ。精悍な整った顔に、短く刈り込んだ髪。昔のイメージとは違う。だけど、忘れるはずがない。
「もしかして……尋？」
「久しぶりだな、恭」
　そこには、僕の数年来の友人……大澤尋がいた。

　１０

「改めて、ご協力感謝いたします！」
　そう言うと、尋の上官とらしい軍人さんは僕に向かって敬礼した。中年というには多少若そうな感じの人だ。
「い、いえ……」
　他の生徒は全て体育館に避難したらしい。高遠さんも、だ。結果、僕だけが現場に残された。
「しかし、その体……失礼、お歳でその銃を使うとは、凄いですな」
　元々僕程度の体格の人間が撃つのを想定していない銃だからなぁ、と苦笑する。
「これは僕の父の形見なんです。まともに扱えませんけど」
「ふむ。お父上。……一之瀬君、でありましたか？」
「はい」
「一之瀬。まさか……」
　軍人さんが眉をひそめた。
「どうかしましたか？」
「い、いえ、なんでもありません！　ご協力、ありがとうございました！」
　敬礼をし、言い残すと、その人は立ち去ってしまった。ラーナの死体を運んだりして、作業をしている軍人さん達の中で、僕は一人取り残される。
「さて、どうしようかなぁ。これから」
　このまま体育館へ向かったら確実に注目の的だ。
「サボるかなぁ……」
　ここまできてサボりも何も無いと思うけど。

「こら、学生はちゃんと勉強しろ」
　低い声に驚いて振り返ると、尋がいた。僕のぼやきを聞いていたらしい。
「疲れたろうし、多少なら良いけどな。……隣、いいか？」
「あ、うん」
　僕の隣に座り込む尋。廊下で座るのは行儀が悪いけど、そんなことはどうでもよかった。
「……久しぶりだね、尋」
「ああ、そうだな」
　昔を思い出す。尋は三つ上だったけど、いい友達だった。いつも僕や皆の面倒を見てくれた。運動も勉強も出来て、友達であると同士に、憧れでもあった。「アーリから人を守りたい」が口癖だった。
高校を卒業後、合格していたのにも関わらず士官学校へ行かずに、そのまま軍隊に入隊した。動機は一刻も早くアーリを殲滅したかったから。そう、あの四年前の事が引き金だ。
「まさか、こんな時に再会するなんてね」
「そうだな。背、伸びたな。少し」
　そう言って尋は少し笑った。
「……少しは余計だよ」
　彼は変わってない。元々高かった背がもっと伸びて、髪は短くなって、細く見える体だけど、軍服の下はきっと鋼のような筋肉があるのだろう。それでも、「尋」だった。
「お前は、変わってないな……体じゃない。心が」
　胸のうちを見透かされたかと思った。
「俺は変わった。お前は、変わるなよ」
　尋の目が遠くなる。
「なんだよそれ……逆だよ。尋は尋だ。僕は変わっちゃったけど」
「そっか、そうかもな。お前がアーリを倒すなんてな。あの女の子みたいだったお前が」
　くっくっく、と尋が笑う。
「ひどいなぁ。それ、未だにトラウマなんだけど」
　昔の僕は今にもまして女の子に見えた。そのせいでからかわれたりしたのも一度や二度じゃない。尋は、そんな僕をいつもかばってくれた。
「気にするな。冗談だ」
「ったく……」
　軽く笑うと尋は立ち上り、僕に背を向けた。
「俺は、人が死ぬのを見すぎた」
　いつもと同じ口調だった。
「昨日は死ななかった。一昨日も死ななかった」
　尋は続ける。
「三日前も。その前も。そして、今日は三人死んだ」
「尋……」

　なんて言ったらいいか分からなかった。
「気にするな。もう、慣れた。慣れてしまった」
　そう言って振り向いた尋の瞳からは、感情が読み取れない。
「お前はこうはなるな。ならないで欲しいんだ」
　それは、僕に言った、というよりは、自分に言い聞かせるような口調だった。
「……頑張るよ。努力でなんとかなるなら、だけど」
「そうだな」
　しん、とした空気の中、突如僕のお腹が鳴った。気付いたのだが、僕は結局うどんをほとんど食べれなかったのだ。
「ふっ……あはははは！」
　尋はそれを聴いて大笑いをした。
「まぁ、もう昼過ぎだもんな。腹ぐらい減るよな」
　尋は僕の肩をバンバンと叩きながら笑い続ける。笑いすぎだって。
「なんかカッコ悪いなぁ。僕」
「まぁ、いいんじゃないか？　そうだ。コレでよかったらやるよ」
　尋はそう言って何かを投げた。受け取ると、それは緑色のパックだった。
「これは？」
「レーションってヤツだ。戦闘用の弁当みたいなものだな。美味いぞ」
　よく見ると深緑のパックに「鳥飯」と黒字で印刷されていた。
「それ食って落ち着け。サボるかどうかは任せる。俺はそろそろ出番だ。アーリの後処理も楽じゃない」
　尋は背を向け歩き出す。その背中に僕は言った。
「尋、また会えるよね！」
　彼は何も言わずに、僕に背を向けたまま手を振った。

　１１

　僕は貰った鳥飯を食べながら、僕はボーっと軍隊の作業を見ていた。彼らによってラーナの死体はもう片付けられ、血だまりを拭いている。
　僕は「ラーナに襲われてケガをした」ことになっているらしい。公認のサボりだ。もっとも、今はどこも授業なんてしていないけど。
「一之瀬恭、何してるの？」
　不意にかけられた女子の声に顔を上げた。
「……委員長」
「質問に答えなさい。一之瀬恭」
　有無を言わさぬ口調だ。
「……僕がアーリを倒したんだよ。だから、さっきまで事情を話したりしてた。委員長こそ、な

んでここに？」
　一般の生徒はまだ軍がガードをしている体育館で待機のはずだ。
「私は、普通じゃないから」
　苦しそうに呟く委員長。その顔は今まで見たことがなかった。
「……どういう意味？」
「なんでもないわ。それじゃ、また」
　踵をかえし、去っていく委員長。軍人さんに何かを話しながら、僕とは逆の方向に歩いていく。
「よく分からないけど……疲れた。やっぱ帰ろう。あ、でも、帰りがけに行っといた方が良いよな」
　僕はカバンを肩に担いで立ち上がる。
「コレ、確かに結構美味しかったな」
　鶏肉が多い炊き込みご飯、という感じの中身。量も十分だった。空になったレーションのパックを学校のゴミ箱に捨てると、僕は駅へ向かった。

１２

　自分の街へ帰り着くと、僕は駅の北口を出た。家へは向かうには普通は南口を出る。だが、今日は北口。北口は小さな繁華街があり、あまり治安はよくない。だが、僕はそのうちの一軒に用があった。本屋、居酒屋などが並ぶ町並みを歩いて、小さい路地に入り、その奥まったところにその店はある。
　少し古びた頑丈そうな鉄の扉を開けた。
「あら、いらっしゃい。久しぶりだね」
　外見より広くて明るい店内。そこは、僕の行き着けの銃砲店だった。
「ご無沙汰してます。木村さん」
　僕に声をかけてくれた二十代後半ぐらいであろう、薄い金属フレームのメガネをかけた女性が店長。通称、木村さん。木村さんはにや、と笑う。
「今日はどうしたのかな？　銃の弾買いに来たの？　あ、撃ってないか。いや、元々、撃てないか」
　言葉がぐさりと突き刺さる。
「う、撃てますよ！　っていうか、撃ちましたよ！　今日は二発も！」
「ふーん。昔一発で肩外しかけた君がねぇ」
　どんどんにやにや笑いが邪悪なものになっていく。普通にしてたら知的な美人なのに。
「……実際扱いにくいのは確かなので、今日は相談に来たんですよ」
「お。やっと自分で銃持つ気になったのかな？」
　実は以前からバックアップの銃を持つことを薦められていたのだ。
「悔しいですが、その通りです」

「ふーん。あんなにサブの銃持つの嫌がってたのにねぇ」
「本当はこれだって持ちたくないんですが……背に腹は変えられません。とりあえず、お願いします」
　木村さんは真剣な顔に戻った。
「なるほどね。事情は後で聞くとして、とりあえずなれる範囲で力になるよ」
銃砲店の二階はシューティングレンジ。そこに僕と木村さんはいた。防音用の耳あてをして、１０メートル先の的を撃つ。発砲音がやがて止み、僕はホールドオープンした銃からマガジンを抜き、チャンバーを確認した。その後、スライドを戻し、セフティをかける。要するに、安全確認の必須動作を行ったのだ。
「ふむ。９ｍｍパラベラム弾ならさすがに余裕だねぇ。命中率もまぁ、一般人にしては上出来かな」
　僕は試射用のベレッタＭ９２ＦＳをレンジのブースに返した。
「一応男ですからね。これでも」
　言いながらレンジの外に出た。
「９ｍｍじゃダメなの？　弾の値段も安いし、手に入れやすいし、それに装弾数も多いけど？」
　この世界で一番普及している弾が９ｍｍパラベラム弾だ。威力も必要十分だし、需要があれば供給もあるので、弾の値段も安い。
「うーん。強力なアーリ相手だと心配ですね。威力不足だと思います」
　そうなのだ。３８口径は人間にならともかく、アーリには効き目が薄い。
「でも、デザートイーグルとかはダメなんだよね」
　デザートイーグルはマグナム弾を発射するオートマチック。
「マグナム二挺持ってても キツいですよ。なんの為にオートマチック持つ気になったんだか分かりません。重いし」
　僕の言葉にふむ、と木村さんが腕組みをする。
「じゃあ、次はとりあえずコレかなぁ。無難に」
　木村さんが出してくれたのは往年の名銃、Ｍ１９１１Ａ１……通称、コルト・ガバメント。
「４５ＡＣＰ弾ですか……分かりました」
　僕は再びレンジに入った。
　チャンバーを確認後、マガジンを入れ、スライドを引き、的を狙って……絞るように引き金を引く。９ｍｍとは比べ物にならない爆音と共に手に残るしびれ。それが７回繰り返される。
　ホールドオープンをしたガバメントを先ほどの手順で安全確認をして、木村さんに返す。
「やっぱり、七発ないし八発は少ないですかね……反動も結構ありますし、銃自体もちょっと重いです。」
「そうか……あ、いや、まてよ……。９ｍｍと４５ＡＣＰの間っていうと……うん、うん。装弾数もあるし、あれなら軽い……うん。悪くない」
　勝手に納得する木村さん。そして。
「君にぴったりの銃が見つかったかもしれないよ？」

　そう言って笑った。
「これ……これ、いいです！」
　数分後。僕は柄にも無く喜んでしまった。
「確かに反動は９ｍｍよりはあるけど、連射できるレベルだし、威力も結構ありますし……こんなに小さくて軽いのに、装弾数もありますし」
「ふふふ。そうでしょ」
　満面の笑みの木村さん。そして、僕の手の中にある銃はグロック２３。
「やっぱりぴったりだったね。４０Ｓ＆Ｗ弾。本当はフルサイズの２２でもよかったんだけど、恭君の手の大きさならセミコンパクトの２３がいいと思ったのよ」
「はい！　最高です！」
　これでアーリに対する武器が増えた。
「それはよかった。けど、いいの？　弾の値段はけっこうするし、それに……確か銃、持ちたくなかったんじゃ？」
　何もかもお見通しか。
「……色々あったんです。だから仕方ないんですよ」
　本当は、戦いたくなんてない。だけどもし何かあったら、そのときに戦うのは「俺」でなく僕でありたい。そして、Ｍ５００はまだ僕には扱いきれない。なら、仕方が無いじゃないか。
「そっか。うん……よし、じゃあ、その銃のホルスター、サービスしちゃう！」
「え？　いいんですか？」
　たかがホルスターとはいえ、いいものは結構するのだ。
「うん。右側にはもう銃があるから……バックサイドホルスターかな。左利き用のがあったはず……ちょっと探してくるね」
　店長はそう言うと、一階へと下りていった。ひとり残された僕はグロック２３をみつめる。ポリマーフレームの銃。確かに圧倒的に軽いのだが、それでも手に重さが伝わる。
「……これが、僕なりの覚悟かな」

１３

　僕は貯金をほとんど使い果たして、グロック２３と色々な必需品を買った。弾、予備のマガジンに加え、メンテナンス用品も色々。なので、ホルスターがサービスだったのはかなり助かった。その銃は早速バックサイドホルスターに入れて吊っている。腰が少し重くなったけど、許容範囲内だろう。
「しかし、今日だけで僕は何発撃ったんだ？　僕は」
　銃を買った後、散々射撃についてレクチャーをされた。グロックは手動の安全装置が無いのから始まり、僕にはガク引きの癖があるだとか、弾道が右にずれているとか、そもそもにしてフォームがおかしいだとか。
　もう、外も薄暗くなるころだ。
「でも、これで守れるものがあるなら、それもいいか」
　帰り道、腰の後ろのグロックを軽くたたいた。心地よい重みだ。Ｍ５００とは違う。
「あ、帰りがけにお菓子っていったら母さん喜ぶかな」
　財布の中身は寒いとはいえ、お菓子を買うくらいのお金ならある。ちょっと食べるくらいならいいだろう。
「えーと。お店行くかな。まだ開いてたっけ」
　夜も近付き、人がまばらになった繁華街を歩く。
「……オラァ！」
　突然怒声が聴こえた、気がした。
「なんだ……？」
　僕はなぜかそれがどこから発せられた声なのかが分かった。奥まった細い道を小走りに走っていく。
「いいから金出せよ！」
　声が大きくなっていく。僕は走る速度を速めた。果たして、狭い路地の行き止まりにその現場はあった。粗野そうな服を着た男三人が、女性を囲んでいた。走ってきたので息が切れていた。僕はカラカラの喉で叫ぶ。
「何やってるんだよ！」
「ああん？」
　男達が振り向く。手には拳銃。だが、サタデーナイトスペシャルと呼ばれる、値段の安い質の悪いものばかりだ。
「なんだよ。お前には関係ねーだろ」
「いいからやめろ！」
「ふーん。じゃあ、代わりにお前が金くれんのかよ？　あ？」
　こっちに向かってくるチンピラ達。僕は反射的に左手でグロックを引き抜こうとして、体の異

変に気付いた。心臓の音が大きくなる。目の前が暗くなっていく。これはまさか……。
「ぐっ……」
――おお。お前、新しい銃買ったんだな。
「黙れ！　出てくるな……消えろ……！」
――つれないなぁ、いいじゃん。俺に試し撃ちさせろよ。
「なん、お前が」
――俺のおかげでこの場所が分かったんだぜ？　いいだろ、ゴミ三つ片付けるくらい。
「消えろ……！」
「何ぶつぶつ言ってるんだよ！」
　僕はいつの間にか近くに来ていたチンピラに腹部を蹴られた。激痛と共に吐き気が僕を襲う。意識が遠くなる。
「く……また……」
　また、視界が暗くなって。そして、上からの視点へと変わる。

　１４

　「俺」がグロックをなんのためらいも無く撃つのが見える。
　まず腕。左手は利き手でないのにもかかわらず、「俺」は電光石火の速さでチンピラ三人の右腕を撃ちぬいた。激痛で銃を落とし、へたり込むそいつらに、今なお銃を向ける。その照準は……眉間を狙っていた。指がトリガーガード内に入り、そして、人差し指が動いていって……。
　発砲音が続けて三つ響いた。僕は思わず目を瞑った。ついに、ついに……人を殺してしまった。
　そこで、僕の視界が光に溶けていって……目を開けると、チンピラは誰も死んでなかった。
　女性が、僕の手を掴んで、上に向けていた。
「そこまでしなくて、いいです……！」
　泣いていた。僕は体から力が抜け、グロックを落とした。
「痛ぇ……痛ぇよぉ……」
　チンピラも涙目だった。
「助けてくれよ！　殺さないでくれよ！」
　これを……僕が。僕が、人を。誰も幸せにならず。誰も救われない。最悪だ……最悪だ！
僕は落ちている銃を拾うと、それをカバンに無理やり押し込み、踵を返した。逃げた。怖かった。もう少しで、僕は人殺しになるところだった。涙が溢れた。あれは僕じゃない。でも、「僕の中の俺」だ。僕であって、僕じゃない。だけど僕じゃないけど、僕なんだ。
「どうして、「俺」が出て来るんだよ、なんで……！」
　今までは命の危機に勝手に出てきた。でも今回は違う。僕から向かった。それなのに。
「畜生……僕は……僕は、なんなんだよ！」
　ラーナの時は抑えられたのに、よりによって人間相手で出てくるなんて……！

　走っていると、いつの間にか雨が降ってきた。僕は疲れ、アスファルトの地面に座り込んだ。繁華街はもう抜けて、自宅とは反対の住宅街の片隅。体が濡れる。だが、そんなことはどうでもよかった。もう、なんでもよかった。やっと、戦う気になれたのに。それなのに。
「僕は自分が怖いよ……」
　ひざに顔をうずめ泣きじゃくった。誰に見られても良かった。むしろ、笑って欲しかった。なのに、誰も道を通らない。
「……どうしたらいいんだよ」
　埋めたまま、僕は呟いた。雨が容赦なく僕をたたきつける。本降りになってきた。ふと、人影が見え、雨が体に当たらなくなった。
顔を上げると、高遠さんが僕に向けて傘を差していた。
「……濡れちゃいますよ？」
「もう濡れてるよ」
　二人で笑う。
「一之瀬君、大丈夫？」
「……多分」
　高遠さんは少し渋い顔をした。
「多分、っていうのが一番危ないんですよ」
「そう、かな……」
　僕は高遠さんから傘を受け取ると、立ち上がった。
「ありがとう」
「いえ。私、いつも一之瀬君に助けてもらってばっかりだったので」
「……僕はそんなたいした人間じゃないよ」
「え、でも、列車の時……あの時、私を……皆を助けれてくれたじゃないですか」
　あの光景がフラッシュバックする。それと同時に、忌まわしい思い出も。
「昔、僕は逃げたんだ」
「逃げた？」
　僕は足を止めた。
「そう。僕は……卑怯者なんだよ」

　四年前。僕がまだ中学生だった頃。僕は、友人三人と一緒に、街の門の近くで遊んでいた。いつもは尋も入れた五人だったのだけれど、その日尋は風邪をひいていたのだ。たまたまだった。運が悪かった。巨大なグリズが、門番さんを殺し、街の中に入ってきた。普段はそんなことはないのに、なぜかその日に限って。
　僕は一目散に逃げた。走って走って走って……夢中になって走って。途中で、友人達が誰もいないことに気づいた。その時にはもう遅かった。全てが終わった現場。軍によって処分されたグリズと、僕の友人達の死体だけが横たわっていた。
　あの光景は今でも僕を苦しめる。

　帰宅した僕は、父親の部屋を探した。机の引き出しに入っていたのは、ホルスターに入ったＭ５００と、その弾が入った小さな紙箱。僕はそれを腰に巻いた。もう、何も失いたくないから。それ以来、僕は銃を肌身離さず持っている。

「でもそれは、一之瀬君のせいじゃ……」
「確かにそうかもしれない。けれど、もし僕が戦えてたら……！」
「一之瀬君」
　高遠さんは傘を持ちかえると、僕の空いている左手に手を重ねた。
「え……」
「あ、ごめんなさい。嫌でしたか？」
　高遠さんが手を離そうとする。
「え、あ、いや、べ、 別に」
　いきなりだったので、妙な声が出た。
「そう、ならよかったです」
　改めて僕達は手を繋ぎなおす。暫く僕らは手を繋いでいた。華奢で柔らかい小さな手。そこから伝わるぬくもりが、僕を安心させる。
「一之瀬君は、確かに、昔は逃げたのかも知れないです」
「……うん」
「だけど。だけどね、私を助けてくれた。二回もですよ」
「そうだね……」
「だから、もう悩まないで下さい。一之瀬君は、強くなれたんですよ」
　高遠さんと繋いだ手が熱い。力が湧いてくるようだ。
「……高遠さん……」
「私、私ね……」
「一之瀬恭」
　何か言いかけた高遠さんの言葉をさえぎり、聞こえたのは……女の子の声。顔をあげると、そこには、傘をさした委員長が立っていた。僕らは慌てて手を離した。
「委員長、なんでここに？」
　誤魔化そうとして、適当なことを言ってみる。高遠さんは真っ赤になってしまっていた。
「そっちこそ」
「僕達は……」
　言いかけた僕を委員長が制す。
「まぁ、どうでも良いわ。少し用事があるの」
　あくまでいつものペースを乱さず、委員長は告げる。
「高遠美野里、貴女に用は無いわ。帰宅なさい」
「委員長、それは……」
「いいですよ、一之瀬君」

　高遠さんは首を振った。
「じゃあ、また学校で」
　高遠さんは踵を返すと、僕達に背を向け、歩いていった。
「委員長……今のは、ちょっとひどくないかな？」
　僕は憤りを隠しながら問い詰める。
「多分、これから一緒に居たら、もっとマズいと思うわ。だから帰ってもらったの」
　委員長はペースを崩さない。
「それより、そっちこそひどい顔よ？」
「あはは……ちょっと、ね」
　委員長はため息をついた。
「人を殺しかけたこと？　気にしないで。あれは正当防衛よ。もう少しで過剰防衛になるところだったけど」
　僕は顔を上げた。
「なんでその事を……？」
　委員長は、僕の目をまっすぐに見た。
「知らないことがいいことも、世の中にはあるわ」
　そこで息をついた。
「それでも知りたいなら、自分をどうしても知りたいなら、付いて来て」
　委員長はそれだけ言い残すと、歩いていった。あの姿が闇へと消えるのを見ているのは簡単だ。そうしたら、日常に戻れるかもしれない。けれど。僕はそんなのは。嫌だ。
　僕は立ち上がり、委員長の背中を追った。

　１５

　委員長の背だけを見て、歩く。もう相当な距離を歩いたと思う。周りの景色に草木が増えてきた。
「街の中にもこんな場所があったのか……」
　委員長は何も言わない。やがて、周りを高い柵で囲われた大きな扉の前に来ると、委員長は立ち止まった。柵の中には堅牢そうな建物がいくつかあった。
「ここよ」
「いや、ここって……」
　ここは確か軍の駐屯地。部外者は入れないはずだ。迷彩の軍服を着て、軍用アサルトライフル、Ｍ４を持った兵士が二人、門の前に立っていた。が、委員長が歩いていくと、二人とも敬礼をした。
「この人は私の友人。中に入っていいわよね？」
「はっ！」
　兵士が門の近くのコンソールを操作すると、門が横に滑った。

「ご苦労様」
「恐縮であります！」
　もう一人の兵士さんは敬礼したまま、そう応えた。
「さ、入るわよ。一之瀬恭」
「いや、その、委員長、これは？」
「そのうち分かるから。とりあえず付いて来て」
　すたすたと中に入っていく。
「分かったけど……」
　仕方なく僕もそれに倣う。中に入ると背中の門が閉じた。閉じる音が収まった後、委員長は立ち止まり、僕に向かって振り向く。
「ようこそ、対アーリ特別機関へ」
　委員長は、挨拶のように、いつもの口調でそれだけ言った。

　１６

　歩きながら周りを見ていく。建物から出てくる人も、入る人も軍用迷彩の服を着ている。皆、明らかに僕を不審な目で見る。が、委員長が睨むと敬礼をする。奥に進むにつれ、だんだん建物が綺麗になっていく。何度大きな壁を抜けただろう。やっと一番奥にたどり着いた。カードキー式のロックがかかっている一番大きな建物の前に、僕らは立っていた。
　委員長はカバンから銀色のカードを取り出すと、カードを読み取り機に通した。ガラス、それもおそらく、強化ガラス……のドアが横に開いた。貴重なはずの電気が豊富に使われている。
「確認するわよ。入ったら、もう戻れない。いいの？」
　僕に背を向けたまま委員長が言う。
「今更、だよ」
　僕は言った。
「そう……」
　心なしか少し寂しそうな声で、委員長は言い、建物の中に入った。僕は震える足を殴りつけ、それに続く。
建物の中は明るかった。至る所に電灯があって、壁も白い。まるで……病院だった。
「神月さん、お疲れ」
「お疲れ様です」
　中にいる白衣の男性達に声をかけられる委員長。
「いったい、委員長は何を知ってるんだ？」
「もうちょっとしたら分かるわ」
　かつん、かつんと白いタイルの上を歩く音だけが聞こえる。どれくらい歩いただろう。そう長くはなかったはずなのに、ひどく疲れた気がする。やがて、大きな鉄扉の前に僕達はたどり着いた。

「開けるわよ」
　彼女は返事を待たずに、カードキーをリーダーに通した。ゆっくりと開く巨大な扉の中に入る。その中は薄暗かった。
「……え？」
　入ってすぐに気づいた。部屋の中は試験管の化け物みたいな大きなものが大量に設置されていることに。
　そして、その中には、様々なアーリがいることに。
「これって……」
「アーリを研究してるのよ。ここでは主に弱点をね」
　周りを見ると、透明な謎の液体に漬かったアーリが山ほどあった。グリズをはじめとするアーリ。見たことの無いアーリも多数いた。
「委員長、なんで僕をここに？」
「話してもいいのね？　後悔しないわね？」
「ここまで来たら、引き下がれないよ」
　委員長は向き直った。真剣な、それでいて悲痛な表情を浮かべて。
「貴方は……貴方は、アーリの血をひいているのよ」
僕は耳を疑った。それから、頭に言葉が入らないことに気付いた。最後に、それが冗談で無いことに気付いた。委員長が泣いていたからだ。
「……ちょっと、待ってくれ。僕がアーリだって？　そんなわけない！」
「真実よ」
　涙声で、それでも、はきはきしたいつもの声でそう委員長は告げる。
「じゃあ何？　母さんとアーリが子作りして僕が出来たって？　そんなのあるわけないよ！」
「違うの。そうじゃないのよ。一之瀬恭」
　なぜか憤りが噴出してきた。
「僕の父さんはちゃんとした人間だよ！　写真だってある！」
「そうじゃないんだってば！」
　委員長が声を荒げるのをはじめて見た。
「……委員長……本当なんだね」
　すっかり毒気を抜かれた僕は、その場に崩れ落ちた。
「詳しい話をするわ。いい？」
　僕は、へたり込んだまま、首を縦に振った。それから聞いた話は、にわかには信じがたいものだった。

　１７

　十八年前。僕の父さんと母さんはアーリの研究をしていた。その当時からアーリはいた。ただ、個体数があまりにも少なすぎるのと、国が緘口令を強いていたせいで、大半の人間は知らなか

っただけで。山や川で襲われた人間は「熊にやられた」「溺れた」と発表された。最初はそれで済んでいた。だが、アーリは数を少しずつ増やしていった。アーリは生殖行動をとる。だが、それにしてはペースが早すぎた。しかも、以前より凶暴な新種も増えていっている。父さんと母さんはその原因を突き止めた。
アーリは、人の悪意や敵意から産まれるということを。
　試験管の中のアーリの目の前で、研究員が悪口を言ったのがはじまり。そのアーリは試験管を破らん勢いで暴れだした。驚いた研究員が黙ると、アーリの動きは鈍くなった。その報告を受けた父さんは早速実験をした。全てを憎み、人を何人も殺した死刑囚を試験管の前に立たせた。罵詈雑言を発するたびにアーリは活発に動き出し、殺してやる、全部、全員、全世界の人間を、と言うと、アーリはなんと……分裂した。
　恨み、妬み、怒り、敵意、悪意……そういったものの結晶。０から出来た純粋な「悪の化身」。そう、アーリは人間の「負」の化身だったのだ。
　その事実を知った父さんは、強制排除ではなく、アーリとの共存を望んだ。撲滅するのではなく、お互いに生きていけるように。そして、最後はアーリがいなくなるように。ならばと、実験として父さんはアーリに自らの血を注射してみた。
効果はてきめんだった。注射されたアーリはまるでペットのように人間になつくようになったのだ。人間とアーリは表裏一体だったのだ。だが、父さんは間違いをおかした。
アーリの血を、自分に注射したのだ。
　暫くは上手くいっていた。自分の血を注射したアーリと、そのアーリの血を注射した父さんは、言葉を発さずとも分かり合えるようになった。その間に、僕が出来た。父さんは、子供と妻と、そして分かり合えるアーリと生きていこうと決めた。だがある日、そのアーリを、国が奪い取ろうとした。解剖や研究の材料として、という名目だったが、実際は、生物兵器としての利用のために。それを感じ取ったアーリは父さんと一緒に逃げようとしたが、追い詰められ、アーリは捕獲。父さんは銃弾のシャワーをあびることになった。
　瀕死の父さんは憎んだ。人を。世界を。全てを。そしてそのアーリは暴走した。国の使者は全て八つ裂きにされた。父さんは虫の息の中、自らの血が騒ぐのを感じたと手記に記したらしい。アーリの血は、傷を修復し、体を成長させた。しかし、その代償は大きかった。父さんは全てを憎むようになり、その姿を異形の怪物へと変えた。人間らしい感情、愛も、友情も、慈しみも全て忘れ、復讐と憎しみの化身として。そしてアーリの力と、人間の知性を兼ね備えた父さん……元、父さんはアーリの王者となった。
　悪意の塊となったアーリの王者は、大量のアーリを生み出した。そのアーリは人間を襲い、襲われた人間はアーリを憎み、またアーリが産まれた。その循環の過程でアーリは莫大な数になり、人間はすさまじいスピードで減少していった。
　僕が生まれたのはその頃だった。その時にはもう人間の数は激減していて、街が出来始めたころだった。僕は結果として「生まれながらに」アーリの血が入った人間として生をうけた。

「信じられない……」
　思わず、そう呟いた。
「そうでしょうね。でも、事実よ」
　委員長はいつもの調子に戻っていた。
「僕に……アーリの血が……？」
　そこで僕は思い出す。真っ赤な瞳の、「俺」を。そして、四年前の友人三人を亡くしたのをきっかけに、僕の周りで次々と起こるアーリの襲撃を。
「もしかして……」
「ええ。多分そう。赤い瞳の貴方は、アーリの血に支配された貴方よ」
　僕の心を見透かしているのか。
「でも、なんで僕を排除しないんだ？　研究対象になりそうなのに？」
「それは……貴方が、アーリの王者の息子だからよ」
「意味が分からないよ」
　質問に対する答えになっていない。委員長らしくも無いことだった。
「貴方に危害が加わると、アーリが活性化するの。どこかで父親と引き合っているのでしょうね……」
　父親。アーリの王者。
「それじゃあ、僕が危なくなったときに目が赤くなるのも？」
「アーリの血が活性化した結果でしょうね。身体能力が上がるのもきっとそうよ」
「僕がアーリの血をひいて……しかも、父親はアーリのボス……」
　体が重い。重すぎて鉄のようだ。潰れてしまいそうなくらいに重い。
「……僕を、なんでここに？」
　核心に迫る問いだった。正直、どうなってもよかった。解剖したいならすればいいし、処分したいならすればいい。そう思っていた。だが、次の言葉はそれとはまったく違っていた。
「貴方に、頼みごとがあるの」
「頼みごと……何？　僕を研究の対象にするの？」
　委員長は首を横に振った。
「貴方に……貴方に、アーリのボスを倒して欲しいの」
「……父親を、殺せ、だって？」
「父親じゃないわ、アーリの――」
「だからそれが父親じゃないか！」
　あまりにも都合のいい話に僕の身体の中に焔が灯る。全てをなぎ払う、否定と怒りの焔。
「大体、なんで僕なんだよ！　僕以外にもたくさん強い人はいるじゃないか！」
「それは……」
　突然、警報が鳴り響いた。
「え？」

「一之瀬恭、話は後！」
　あっけにとられる僕を置きざりにして委員長は部屋の隅のコンソールに向かって走る。
「報告！　状況！　どうなってるの！」
「アーリの襲撃です！　神月さんも早く退避を！」
　コンソール越しに軍人さんの顔が映る。
「分かってる！」
　委員長は怒鳴り返すと、僕のほうに向き直った。
「シェルターまで行くわよ、一之瀬恭！」
　手を引っ張られる。
「あ、ああ……」
　入り口までつかつかと歩く委員長。僕はそれについて行く。ドアが開くと、廊下は慌しかった。警報と共に機械的な音声が流れてくる。
「……繰り返します。研究員、非戦闘員はシェルターに避難をしてください。戦闘員はレベルⅢ装備をして、配置についてください。繰り返します……」
「ああもう。大人って、どうして！」
　委員長は我先にとシェルターに走る白衣の研究員にうんざりしている。
「大体、レベルⅢ装備って……どうなってるのよ、もう！」
　聞きなれない単語だった。
「レベルⅢって？」
　イライラした声が返ってきた。
「ブローニングＭ２の搭載車に、携帯武器はＲＰＧ―７！　狙撃銃はバレットＭ８２！　セカンダリーウェポンはデザートイーグル！」
「人間が相手じゃない装備だよね……対アーリなんだろうけど、やりすぎなんじゃない？」
　僕は至極当然の意見を言った。
バレットＭ８２は１２．７ｍｍ口径の銃。人間に当たれば一撃で真っ二つだ。（元々人間に撃つ銃じゃないのだが）更に、ブローニングＭ２はそれを連射する重機関銃。ＲＰＧ―７はロケットランチャーで、元々は戦車を破壊するためのものだ。デザートイーグルは５０口径のオートマチック拳銃。僕のＭ５００ほどではないが、とても強力な弾を使用する。
「周囲を焼け野原にする気なのかな」
　その言葉を聞いた委員長は鼻で笑った。
「そうだといいんだけどね」
　刹那、轟音が響いた。
「な、なんだ？」
　いまだ僕を引っ張ったまま、委員長は平然と言う。
「第一隔壁が突破されたのよ」
　第一隔壁。最初に入った門だろうか。あの、Ｍ４を持った軍服の人が二人いた……。
　……二人？

「委員長、被害ってどれくらい？」
「さぁ？　もう数人、いや、下手をしたら十数人は亡くなってるかもしれないわね」
　何事も無かったかのように発せられる言葉に、僕は無意識に掴まれた手を振り解いた。
「一之瀬恭？　何してるの？」
　問い詰めるような口調だった。僕がなんて答えるか、想像がついたのだろう。
「助けに行く」
　そう僕が言うと、委員長は大きなため息をついた。
「バカ言わないで。貴方は切り札なのよ？　早く避難をしましょう」
　切り札、か。
「僕はジョーカーじゃない。単なる「２」のカードだよ。だから、僕は助けに行く。一番弱いコマなら失っても痛くないだろ？」
　本心だった。僕に何が出来るのかは分からない。素人が出る幕は無いのかもしれない。だけど、もう逃げないって決めた。あの誓いを簡単に破るわけにはいかない。
委員長は大きなため息をついた。
「ああもう……勝手にしなさい！　でも、私も付いていくわよ！　貴方が死んだら大変なんだから！　いいわね！」
　委員長は、右手を差し出した。
「……握手？」
　委員長また大きなため息をつく。
「ため息つくと、幸せが逃げちゃうよ？」
　昔、そんな話を聞いたことがある。
「違う！　ああもう、いいから銃貸しなさい！　自分の身ぐらい守るから！」
「委員長、銃持ってないの？」
「今あるのは護身用で口径が小さいのよ！　大型の危険なアーリには利かない！」
　そういうことだったのか。僕はバックサイドホルスターからグロックを抜いて、マガジンを抜くと、チャンバーの中が空であることを確認して委員長に渡した。予備のマガジン二個も渡す。弾はもう込めてある。
「あれ？　でも、そもそもにして委員長、銃使えたの？」
　渡してから気付いたが、無骨で、玄人好みのグロックを使えるものなのだろうか。口径も４０口径だし。
「なめないで。これでも自信はあるわ。今は持ち前の銃が無いけど、今度機会があったら見せてあげる」
　もの凄くカスタムしてるガバメントでも持ってるのかな。
「とにかく急ごう、委員長。先導して！」
　委員長は頷いた。
「死んだら大損失じゃ済まないのを忘れないでね！　ジョーカーじゃないならエースなんだから！」

切り札でないなら、切り札にもっとも近い存在、か。僕は、小さく笑った。

１９

シェルターに逃げる非戦闘員達の波に逆らって、がらんどうになった施設を逆走していく。
「やっぱり、無駄に広くないかな、ここ……」
室内で走って息が切れるなんて初めての経験だ。
「無駄じゃないわよ！　研究施設なんだから！」
対して、委員長は全く息が切れていない。男子のメンツが丸つぶれだ。やっぱりもっと身体を鍛えよう。……生きて、ここを切り抜けられたなら。
「一之瀬恭、次の扉で最後！」
委員長はその扉を開け放った。数歩遅れて僕が続く。そこに広がる光景は、どこかで予想していて、どこかで否定していて。それでいて、昔見た光景に似ていた。
倒れている軍服の男性達。応戦している僅かな兵士。
戦っているのは、見たことも無い四足の超大型のアーリ。二階建ての建物以上……五メートルより大きい体躯なのに、動きがかなり俊敏だ。
「食らえ！」
僅かな生き残りの一人が撃ったＲＰＧ－７のロケット弾をなんなくかわすと、そちらを向いて、足を振り上げると……そのまま、踏み潰した。断末魔の叫びに、思わず顔を背けてしまう。
隔壁は無残にも崩されていた。あんな分厚い、コンクリートと鋼鉄の壁を。
「ゾーバ……」
委員長が呟くのが聞こえた。
「なんだよ……こんなアーリ、見たこと無いよ。ゾーバ？」
グリズにラーナは実はかなり危険なアーリだ。中堅どころ、いや、上の下くらいだろう。それだけに、少し体長が大きいだけで大変なことになる。線路の上のグリズや学校に出たラーナはそのいい例だ。大きいということは、それだけで脅威になる。
「象とカバが元になったアーリ……ダメ……こんな……」
委員長は僕の手を引いて建物内に戻ろうとする。
「な、なにやってるんだよ委員長！　僕たちも戦わなきゃ！」
「無理よ！　正規軍があんな状態なのよ！　逃げましょう！　シェルターの中ならきっと大丈夫！」
「嫌だ！」
僕は掴んだ手を乱暴に解いた。
「……一之瀬、君……？」
委員長が君付けで誰かの名前を呼ぶのをはじめて聞いた。その声はいつもと違って、ただの震えた女の子のものだ。
「いいん……いや、神月さんはシェルターに行って。僕は戦うよ。グロックを渡して欲しい」

「貴方が死んだら、全部無駄になるのよ！　私の努力も、人類の未来も！」
　神月さんはグロックを背中に回した。渡さないことで、無意識下に拒否をしているのだろう。
「大丈夫。僕は死なないよ。だから、安心して」
　彼女がおずおずとグロックを差し出してきた。僕はそれを受け取るとバックサイドホルスターに入れ、アーリに向きなおった。Ｍ５００をホルスターから抜く。
「じゃあ、行ってくる」
　僕は走った。アーリの元へと。神月さんが何か言うのが聞こえたけど、僕は振り返らなかった。
遠くに見えた戦闘現場は、思ったよりも近かった。血の匂いがひどい。生きている人たちは果たして何人だろうか……。そんなことを考えている間にもゾーバの前足の踏みつけでで数多の命が散っていく。まるで子供がアリを潰すように。
ＲＰＧもブローニングもバレットも撃つ余裕がないらしく、アサルトライフルか、デザートイーグルで応戦している状態だ。
　だが５．５６ｍｍ弾も５０ＡＥ弾もあまり利いているようには見えない。僕のＭ５００でも通用するかは分からない。一目散に応戦している人たちが居る場所に走った。
「けが人を連れて、逃げてください！」
　到着すると同時にそう叫ぶ。
「し、しかし、貴方は神月先生と一緒にいた……」
　先生付けか。いったい彼女はどれくらいの地位にいるんだろうか。
「僕があとはやります！　応援は申請しましたか？」
「あ、あと数分で軍の警備隊が来るそうです」
　一瞬、尋の顔が頭をよぎった。
「時間稼ぎは任せてください。さぁ、下がって！」
　無言で頷いて、負傷した兵士を引きずっていく残り少ない無傷の兵士。僕は落ちていたＭ４を拾って、チャンバーとマガジンを見て、残り段数が２０発以上はあるだろう事を確認する。マガジンも５．５６ｍｍ弾も散らばっている。バレットも落ちている。
「これなら十分かな……」
　ゾーバが部隊が後退し始めたのに気付いたのか、距離を一気につめてきた。僕はその顔に三点バーストにしたアサルトライフルの弾を浴びせた。ばらら、と音がして、手の中で銃が踊る。弾丸は命中したらしく、ゾーバの絶叫が聞こえた。チャンスだ。今しかない。
「使いたくないけど……、仕方ない。おい！　出て来い！」
　僕が叫ぶと、心臓の音が大きく聞こえた。ドクン、と大きく鳴る。
――なんだよ？
「僕の体を使って、あいつを倒せ……！」
――ずいぶん勝手な言い草だな？
「僕が死んだらお前も困るだろ？」
――ったく。仕方ねぇな。

僕の意識は一端途切れ、それから、空中に視点が移った。
「さて……いっちょひと暴れすっか！」
　赤い目の「俺」はライフルのマガジンを代えると、ゾーバに向かっていった。

２０

「うらぁぁぁ！」
「俺」はＭ４の三点バーストを途切れなく、まるでフルオートの用に撃ちまくる。だが、１２．７ｍｍでも厳しい相手だ。５．５６ｍｍ弾で大きなダメージは期待できない。顔や間接など、的確にポイントを狙わねばならない。巨体でありながら動きの素早いゾーバにそれを行うのは大仕事だったが、「俺」はなんなくやってのける。
「ちっ！　もっと口径の大きい銃は……」
　周りを見回す「俺」。ブローニングは車が横倒しになっていて使えない。ＲＰＧはさっき通用しないことが分かった。残りは……近くにバレットがあった。幸運なことにそれほど痛んでいない。
「おお、いいもんがあるじゃねぇか！　もっと早く教えろよ！」
――「俺」ならそれでも十分だと思ったんだよ。
「へっ！　よく言うぜ！　まぁいいけどよ！」
　バレットに弾を装填して、ゾーバに向ける。膝の関節付近だ。
「おらあっ！」
　おおよそ人間が手に持って使うとは思えない武器。その轟音が響く。それも連発で。左足の膝を狙って、六発。そしてそれは吸い込まれるようにゾーバに当たり、地響きを起こすぐらいの叫びがあたりに響く。左足のバランスが崩れた。
「よし、倒れろ！」
　歓声をあげる「俺」。しかし、ゾーバは傷ついた足で大地を踏みしめ、倒れるのを防いだ。そして、そのままこちらに向かってくる。
「ヤベ！」
　ゾーバは巨木の様に太い右足を振り上げ、そして、そのまま振り下ろす。「俺」はバレットを投げ捨て、横に転がり込むようにして距離を取り、危うく踏み潰されるのを避けた。起き上がるのと同時に、腰の銃を抜いて、四発連続して撃った。西部劇のような早撃ちをＭ５００で行ったのだ。いくら拳銃とはいえ、至近距離からのマグナム弾はライフル弾にも匹敵する。右足の間接に四発が命中した。
「流石に利いただろ！」
　泥だらけになりながら体を起こす。いくら大型の凶暴なアーリとはいえ、両方の前足に深いダメージを負えばあの俊敏な動きはできないだろう。
「さてと、後はなぶり殺しにするだけだな……」
――もういいだろ。とどめをさせ。

「僕」が声をかける。
「うるせぇよ。面倒くさいトコだけ俺にやらせやがって。楽しむくらいいいだろ？　どうせ殺すんだからよ」
――さっさと楽にしてやれよ。一発残ってるだろ。
「俺を泥だらけにさせやがって。穴だらけにしねぇと気がすまねぇよ」
――やめろって言ってるだろ！
「ったく……おい、そこに居るんだろ！　委員長さんよ！」
　暫く間が空くと、木陰から神月さんが出てきた。そして「俺」は……銃を、神月さんに向けた。体が強張るのが分かった。
「あの化け物と遊ばせろよ。人差し指が滑りそうだぜ。意味、分かるよな？」
――お前！
「一之瀬恭じゃない、わね……？」
　今まで震えていただけだった委員長が、口を開いた。
「あ？　俺は一之瀬恭だぜ？　委員長さん」
　軽快な口調で言う「俺」。
「違う！　一之瀬恭はそんな事言わない！　そんな眼の色してない！」
　委員長が叫ぶように言う。
「なんつーかなぁ……ずいぶんモテるんだな？　お前」
――そんなのはどうでもいい！　銃口を下げろ！
「だから、遊ばせてくれたらな。あのオモチャでさ」
　神月さんに銃を向けたまま、時だけが流れる。ゾーバの両足からは今も血が滴っている。その時だった。
「撃てー！」
　大声と共に、ゾーバにＲＰＧが何発も打ち込まれた。炎の中、絶命の叫びだけが響いた。軍の応援が到着したのだ。
「あー！　くそ、畜生！　モタモタしてるから！　あーあ、勿体無い事しやがって！」
　髪をかきむしる「俺」。
「よこせ！」
「俺」は硬直している神月さんに近づき、抜き放ったグロックを向ける。
「君、大丈夫か！」
　ジープから多数の軍人が降りてくる。その内の数人が「俺」達の方へ来る。
「へっ。くっだらねぇ」
　「俺」は神月さんの後ろに素早く回りこむと、首を左腕で絞め、右手のグロックをそのこめかみに当てた。委員長が苦しそうに息を吐く。
「君、何をしている！」
　数名の軍人がこちらにＭ４の銃口を向けた。
「あんたらが俺のオモチャをダメにしてくれちゃったからよ。俺と遊んでくれない？　実弾でサ

バイバルゲームなんてメチャクチャ面白そうじゃねえか」
「ふざけるな！」
　数名の軍人が狙いを定めたまま叫ぶ。
「いいじゃん。それとも何か？　国民の命を守るのが仕事の軍人さん達は１７歳の女子高生の命ひとつも守れないのかよ？」
　ははは、とバカにしたような笑いを浮かべる「俺」。神月さんの顔色が少しずつ悪くなっていく。
「……狂ったか、恭」
　一人の軍人が前に進んできた。
――尋！
「大澤伍長、貴官の知り合いか？」
　上官らしき軍人が尋の背中に声をかける。
「そうであります。本官の幼馴染であります」
　淡々と尋はそう言った。しかし、言葉の端に不安が見て取れる。
「お前、本当に恭なのか……？」
　ライフルを向けたままじりじりとこちらに向かってくる尋。
「ああそうだよ。俺は一之瀬恭だよ。見りゃ分かるだろ？」
　グロックを委員長から尋に向ける「俺」。それを見て尋が止まる。
「それ以上近付くなよ。撃つぜ」
　だが、尋は怯まない。
「俺はボディアーマーを着ている。拳銃弾なら防げる。お前はライフル弾の直撃に耐えられるのか？」
　言いながら足を進める尋。だが、「俺」もまた笑う。
「頭狙えば関係ねーじゃねーか。それに、上手くこの女を避けて、俺だけに当てられるか？」
「なめるな。俺は狙撃手の選抜メンバーだぞ」
　ライフルをじっとを構える尋。グロックを向ける「俺」。しばらくのにらみ合い。その終わりは一瞬の出来事だった。緊迫した辺りに、一発の銃声が響き、左手の銃を取り落とす「俺」。見ると、右肩から血が溢れていた。
「くそ、狙撃か……」
　言うまもなく複数の軍人に押さえつけられる「俺」。委員長は救出されている。「俺」は押さえつけられたまま、出血で意識を失ったようだ。
――よし、なんとかなった……。
　そして、僕の意識もまた闇に落ちていった。

　２１

「……大丈夫か？」

　その声に僕は重いまぶたを開ける。尋の顔越しに真っ白な天井が見えた。
「目が覚めたか？」
「うん……痛ッ！」
　あまりの痛みに僕は思わず右肩を押えようとした。けどどうやら拘束されているらしく、両腕も体も動かない。足までベルトで縛られている。気づけば着ている服も水色の病院用パジャマだった。
「まぁ、右肩に風穴が空けばな……大丈夫か？」
　尋はあまり感情を表に出さないが、それでも本気で心配してくれているのが分かった。
「……なんとか。えーと。きっと僕が神月さんを人質に暴れてたんでしょ？　だから撃たれた。バレットで撃たれなくてよかったよ。右腕が吹き飛ぶ」
　尋が驚いた顔をした。
「確かに狙撃手が撃ったのはＭ２１だが。お前、意識があったのか？」
　Ｍ２１は７・６２ｍｍ弾を使用する狙撃用ライフル。Ｍ４の５・５６ｍｍ弾の倍近くのパワーがある弾を使う。
「うん。っていうか、尋、僕が僕じゃないって分かってくれたんだ」
「お前があんなことするはずが無いからな」
　尋が僕を信頼してくれていることが嬉しかった。
「お前を拘束してるのは上部の命令だ……俺にはどうしようもない。すまんが暫く我慢してくれ」
「いいよ。あれだけ暴れれば、仕方ないよ」
　本当は暴れたのは僕じゃないけど。
「確認する。……あれはお前じゃないんだよな？」
「うん。僕であって僕で無いっていうか……」
　流石に上手く説明できない。大体、「俺」はいったい何者なのかも正確には分かっていないのだ。
「それについては私が説明するわ」
　自動ドアが開く音がした。そして、その声は。
「委員長、無事だったんだね！」
「私は少し息が出来なかっただけだから。すぐ治ったわよ」
　いつもの委員長だ。それが分かって、僕は安心する。
「神月研究員、ご苦労であります！」
　尋のビシッとした声が聞こえた。委員長、本当に偉いんだなぁ、と場違いなことを考えた。
「別にかしこまらなくていいわよ。他に誰もいないんだし」
「ですが……」
「いいの。それより、一之瀬恭の拘束を解いてくれない？」
「申し訳ありませんが、上官の許可がありませんと……」
　かしこまった声の尋。

「じゃあ、許可取りに行って。いい？」
「はッ！」
　ドアが開いて、閉まった音がした。
「一之瀬恭、平気？」
「委員長、さっきはゴメーー」
「私が平気かって聞いてるの」
　言いかけた言葉に思いっきり横槍を入れられた。
「……はい、平気です。ちょっと痛いけど」
　有無を言わさない委員長の雰囲気に気圧されてそう答える。
「それは平気って言わない。右肩は貫通銃創？」
「みたいだね」
「そう……もう処置は終わってるでしょうし、少し話できるわよね？」
　有無を言わさず、といった口調だ。
「いいよ。……改めて、委員長、大丈夫？」
「全く問題なし」
「ならよかった」
「もういい？　本題に入るわよ？」
　僕が息をつくと委員長が呆れた声を出した。
「うん。もう大丈夫だよ」
「貴方、さっきはアーリの血を操れていた？　それとも、支配されてたの？　どっち？」
　ストレート。突き刺さる質問だった。
「操ろうとして……失敗した」
「そう……」
　沈黙が部屋を支配する。
「やっぱり僕は、アーリの血に支配されていくのかな。これから……」
「きっとそうでしょうね。徐々にか、一気に、かは分からないけど」
「そっか……僕はどんどん化け物になっていくんだね……」
「残念だけど、そのようね」
　ベッドに拘束されているので分からなかったが、委員長の声は震えていた……気がした。
「そっか。そう……だよね」
　体から力が抜けていく気がした。僕は、アーリになる。その運命は恐らく変わらない。逃げることが出来ない運命。生まれたときから背負うカルマ。
「一之瀬恭、やっぱり、戦うのは嫌？」
「嫌だよ。そりゃね。だから教えて欲しい。なぜ僕が戦わなければいけないのか。元だけど、父親とね」
　委員長は息を吐いた。
「……貴方とアーリのボスは大元は同じ。だから、共鳴しあう……世界中にあなただけなの。ボ

スの場所が分かるのは」
　一語一句、搾り出すように彼女は言った。
「だから僕なのか……レーダー役ってこと？」
「そう。勿論軍隊の精鋭もボスの討伐には参加する。貴方はオブザーバーでいい。だけど、必然的に危険な場所に赴かなければいけない。距離が離れれば離れるほど、お互いを引き付ける力は弱くなるから」
「そっか……」
　僕にしかできないこと。僕に生まれつき備わった力。もしかしたら、僕の生まれた意味。しかし、そこで僕は疑問にぶち当たった。
「……辺り一帯を空爆とかするのはダメなの？　それだったら凄く大まかな位置だけでも十分じゃ？」
　委員長はため息をついた。
「爆撃機なんて現存してないわよ……」
　確かに。それに、アーリのボスに火や爆弾が利くのかもわからない。
「軍隊で全面戦争とかはできないの？」
「無理よ。陸路で移動したら個別にアーリに襲われるし、空輸に使うヘリは数も燃料も足りなすぎる」
　八方塞がりで、残ったのが僕を使う方法だ。……けれど、そこに僕の意思は無い。
「そう……それで、もし僕が断ったら？」
　そう聞かずにいられなかった。
「この街は、いえ……この世界は、アーリのものになるわ」
「母さんも、高遠さんも、尋も、木村さんも、学校の皆も……委員長も？」
　委員長は黙って頷く。
「ええ。誰一人として生き残らないでしょう。人間が壊滅するのには長い時間がかかるかもしれない。けれど、抵抗しても結局最後は訪れる。間違いないわ」
「猶予は？」
「あまりない。最近、アーリの活動が活発になりすぎている。できれば今日この場にでも決めて欲しいくらい」
　悩む暇すら与えられないって事か。
「せめて、明日の朝まで時間くれない？　ダメかな？」
「いいわ。また明日の朝来るから。それじゃ」
　委員長が遠ざかる靴音が聴こえて、ドアが開いて、閉まる音がした。
「……はぁ。拘束されっぱなしかぁ。尋、まだかな」
　噂をすれば何とやら、ドアがノックされ、威勢のいい声が響く。
「神月研究員！　失礼してよろしいでしょうか！」
「委員長ならもう行ったよ。尋、少し話しない？」
　僕がそういうと、尋は無言で入ってきた。

「拘束、外すぞ」
　それだけ言うと鍵の音がして、程なく僕は自由の身になれた。
「ふぅ……あー。痛かった」
　僕は身を起こす。尋が複雑な顔で僕を見る。
「悪かったな。命令とはいえ、縛り付けたりして。もう命令も解除されたから、施設内なら動いてもいいぞ」
「気にしないでいいよ。実際僕はそれだけのことをしたわけだし。……あ、僕じゃないけど」
「ややこしいな」
　尋が軽く苦笑いをした。
「でも、本当にそうだから仕方ないね」
　僕も苦笑する。
「それはそうと、恭」
　一転、尋の顔が真剣になる。
「何？」
「お前、行くのか？　討伐に」
　僕は肩をすくめた。
「検討中だけど……行かなきゃな、とは思ってる」
「なら、行かない方がいい。行かないでくれ」
「え？」
　陣の言葉は予想外だった。
「これは、軍人としてではなく、俺個人、大澤尋個人として言う。俺はお前が危険な目にあって欲しくない」
「でも、僕が行かないとアーリのボスの場所が特定できないんでしょ？」
「それはそうだが……本来、俺達軍隊がすべき仕事なんだ。一般市民を、ましてや友達を巻き込みたくない」
　尋は僕を真っ直ぐに見ていた。
「僕だって本当は行きたくないさ」
「なら……」
「でもさ。僕がここで寝てる間に、誰かが死ぬとか……そういうのは、もうごめんなんだ。皆を守りたいとは言わないよ。ただ、指をくわえて待ってるのは嫌だ」
「……そう、か……」
　尋が僕のベッドの横にあるパイプ椅子に座る。
「お前、親父さん撃てるのか？」
「会った事もない父親だから、あまり実感が湧かないけど……多分」
　尋の顔が厳しくなった。
「撃て」
「撃てって……そんな簡単に……」

「簡単じゃないのは分かってる。でも、撃て。躊躇いは死を招く。撃ってくれ」
　尋の目は痛みと悲しみを湛えていた。
「それができないと、死ぬんだ。それで死んだやつを沢山見てきた。同僚も、上官も、部下も。もうあんな思いはしたくない」
「じゃあ、なおさらだね」
　意識せず言葉が出た。
「大丈夫。僕は死なない。だから、安心してよ。もう軍人さんも亡くならなくて済むよ。そっちの方がいい。絶対に」
「……そうか」
　尋は悲痛な面持ちで僕を見る。
「尋、訓練してよ。僕を。準備完了までは多少時間があるんでしょ？　最悪、明日の朝まではある。今何時かな？」
「午後六時だが……」
「拳銃はともかく、ライフルとか、格闘術とか、ナイフとかはからっきしだからさ。付け焼刃かもしれないけど、覚えておいた方がいいでしょ」
　尋は大きなため息をついた。
「……分かった。だが、条件がある」
「ん？　本当は一般人に教えちゃいけないとか？」
「それもあるが……そうじゃない」
　言葉を濁す尋。珍しかった。
「……俺も先発隊に志願する。もとから志願するつもりだったが……お前の力で、先発隊に選んで欲しい」
　尋の瞳は炎を宿していた。こうなったら尋は譲らない。
「まぁ、委員長には言っておくよ。受理されるかは分からないけどね」
「そうか……よし、約束だ」
「ああ。だから頼むよ、尋」
「そうと決まれば、早速特訓だな。この部屋は広いからここで訓練もできるだろう……ちょっと待て、お前、肩の傷は？」
「あれ、そう言えばあまり痛くない」
　肩の包帯を解くと、傷口はほとんど分からないくらいに塞がっていた。
「さっきは痛がってたのに？」
　尋が僕をまじまじと見る。
「……きっと、アーリの血のせいなんだろうね。アーリの再生力はすごいから」
「恭……」
　尋がこぶしを握りこんだのが分かった。
「そんな顔しないでよ。丁度いいでしょ？　さぁ、訓練しようよ」
　僕は少し責任を感じたのでそう言った。

「……本当に痛くないのか？」
「大丈夫だって」
　尋は腕を組んだ。
「ならいい……分かった。今訓練用のゴムナイフと、Ｍ４を持ってくる」
　尋はまた慌しく部屋を出て行った。
――お前、俺のおかげだぜ？　傷が治ったの。
「……撃たれたのがそもそもにして「俺」のせいだろ」
――つれねぇなぁ。ちょっとしたおふざけだよ。おふざけ。
　その言葉に僕の血が一瞬にして沸騰したかのようになる。
「ふざけて人の命を扱うな！」
――おーおー。怖い怖い。
「もう出てくるな……僕は、『俺』なんかいなくても戦ってみせる」
――あれ？　お前、気づいて無いのか？
「何がだよ？」
　僕がそう言った瞬間、心臓が大きく響いた。めまいがする。床に倒れる。
――もう、お前の体は「俺」のものみたいなもんなんだよ。言葉には気をつけな。
「……うるさい！　僕は……僕は、「俺」なんかになるか！」
　大きく叫ぶ。その瞬間、鼓動が元に戻った。
「治まった……？」
「恭！　さっきの声はどうしたんだ！」
　尋が戦闘訓練用の装備を持ったまま部屋に飛び込んできた。
「ああ……うん、なんでもない」
「なんでもない……？」
「そう。もう大丈夫。さぁ、訓練を始めようよ」
　尋は訝しげな目で僕を見たが、ひとつ息をつくと、マガジンの入ってないＭ４を僕に渡してくれた。
「それじゃあ、演習を始める」
「よろしく」
　大丈夫だ。僕はまだ人間だ……。自分で考えながら、笑ってしまう。……まだ、か……。

　それから僕はライフルの扱い方、ナイフの使い方、徒手空拳を申し訳程度に習い、日付が変わる頃、ベッドに入った。入ったのはいいのだが……寝付けない。心配事が多すぎる。家に連絡はあったのだろうか。学校はどうしているだろう。皆は無事だろうか。そうやって気づけば母さんの携帯と高遠さんの携帯にメールを打っていた。
「僕は生きてる。安心して。そっちは？」と。母さんから直ぐに返事が返ってきた。
「それならよかった。こっちは平気。早く帰ってきなさいよ」
　僕は、携帯を抱きしめ、少しだけ泣いてしまった。もっと強くならなくちゃいけないのに。戦

わなくちゃいけないのに。僕がこんなに弱くちゃ、ダメなのに。打ちひしがれていると携帯がまた震えた。メールの差出人は「高遠さん」となっている。
　件名は無し。本文には一行だけ。
「夜中にすみませんが、お話がしたいです。今から会えませんか？」
　今でこそ拘束はされてないけど、きっと見張りはいるだろう。数は少ないかもしれないけど。勿論、外出なんて許可されるはずが無い。だったら、結論はひとつ。僕は窓の外を眺めた。ここは一階だ。そして、見たところ警備もいなかった。場所は……意外にも、街の中心部からさほど離れていない。携帯に返事を返す。
「待ってて。場所はどこがいい？」
　返事が来るまでに部屋を見回す。僕の服はぐしゃぐしゃになって、部屋の隅に置いてあった。肩の部分が裂けたりしていてボロボロだが、この病院パジャマよりは目立たないだろう。深夜の街を青いパジャマで疾走してたら、注目の的になってしまう。着替えて、靴を履き、こっそりと窓から抜け出す。待ち合わせの場所は、高遠さんの家の近くの公園にした。女の子の一人歩きはあまり褒められたものではない。僕は公園まで走った。不思議と息は切れなかった。スタミナがついたのか、アーリ化が進んでいるのか。走って、走って、走って。気づけば、僕は待ち合わせの公園前にいた。小さな電灯が、たった一人で広場の真ん中に居る高遠さんを照らしていた。
「高遠さん……」
　俯いていた高遠さんは、僕の声で顔を上げた。
「一之瀬君、来てくれたんだ」
　その顔には安堵が浮かんでいた。
「来るよ。メールしたんだから。……話って？」
「うん……こっち、来て」
「いいけど？」
　僕は高遠さんに近づく。一歩、一歩。
　もうかなり距離が近い。
「これくらい？」
「もう、ちょっと……」
　少しずつ埋まっていく距離。夜の公園。女の子と二人っきり。僕は妙なことを意識してしまう。不意に高遠さんが距離を詰めてきた。間近になった長くて艶やかな黒髪から甘い香りが漂ってきた。彼女が、僕の手を握る。柔らかくてすべすべした、暖かい感触が僕の手に伝わる。
「たたた高遠さん？」
　不意のことに動揺して声が上ずってしまう。
「お願い、一之瀬君、行かないで」
　そう言って僕を見上げる高遠さんの瞳は潤んでいた。
「えーと、何のこと？」
　僕はとぼけてみせた。勿論、騙しきれるとは思わないけど。
「神月さんからメールが来たの……もう、誤魔化さないで」

　委員長経由か。しかし、なぜ高遠さんに教えたのだろう……。
「僕が行くと、何かまずいのかな？」
　もっと気の効いたことを言えたらいいのに、と思いながら、僕は言葉を紡ぐ。
「だって……死んじゃうかもしれない！　一之瀬君がいなくなっちゃう！」
　彼女の悲痛な叫び声なんて初めて聞いた。
「行かないで……私、一之瀬君と一緒にいたい……一緒に学校に行って、勉強して、笑ってたい……」
　声が涙声になっていく。
「でも僕は、このままだとアーリになっちゃうんだよ？」
「それでもいい！」
　縋るように僕を見つめる高遠さん。
「私、一之瀬君とずっと一緒にいる。だから……」
　次の言葉は無かった。高遠さんは俯いたまま泣き続けた。涙が、コンクリートを濡らしていく。
「……大丈夫。僕は帰ってくるよ」
　どのくらいの時が経ったのだろう。僕は手を離さない彼女に、そう言った。
「本当に……本当に、帰ってきてくれますか？」
　僕の手が強く握られた。
「うん。約束する」
　嘘だ。嘘っぱちだ。そんなこと、誰にも約束できはしない。だけど。
こういう嘘なら、僕はついてもいいかもしれないと思う。
「ありがとう……あの、最後に、お願い、聞いてもらっていいですか？」
「何かな？」
　高遠さんの顔が赤くなった、気がした。
「い、嫌だったらいいんですけど……」
「頼まれごとにもよるけど……何？」
　彼女はまた暫くもじもじしていたが、やがて顔を上げた。
「……抱きしめて、くれませんか？」
　その一言で僕の思考がフリーズした。
「え？　聞き間違い……かな」
「多分、聞き間違いじゃないと思います」
　頭の中がぐるぐる回る。考えがまとまらない。
「……ごめんなさい。やっぱり、嫌ですよね」
「い、いや、嫌じゃない！　嫌じゃないけど……いいの？」
　高遠さんはこくん、と頷いた。
「じゃ、じゃあ、いきます……」
　手を離した僕は、おずおずと高遠さんの背中に手を回す。そしてそのまま……腕に力を、ほん

の少しだけこめた。女の子の体はこんなに柔らかくて、温かくて、華奢だったなんて。まるでガラス細工みたいで、強く抱きしめたら壊れてしまいそうだった。
「しばらく、こうしててください……」
　抱きしめるだけでも大仕事だったのだけれど、予想以上の注文が来た。でも、僕は何も言わなかった。それが高遠さんの望みなら。自分の胸の中で泣き続ける高遠さん。少し息苦しいような感情。僕は、きっとこういうのを守りたくて、戦うんだ。
　いつまでそうしていたのだろう。自然と体が離れた。
「……一之瀬君、ありがとう」
「うん……」
　もっと気の利いたことを言いたいけど、言葉が出てこない。
「……これ、お守りにしかならないかもしれないけど、使って欲しいの」
　高遠さんはワルサーＰＰＫと、そのマガジンを差し出した。口径は７．６５ｍｍ。３２ＡＣＰ弾を使うタイプだ。恐らく、グリズと遭遇したときに彼女が撃った銃。僕はそれを受け取った。
「ありがとう。ポケットに入れておくね。……これも、ちゃんと返すから」
「はい。約束です」
「約束、だね」
　僕達は暫く立ち尽くしていた、そして、お互い、また明日会うクラスメートのように、軽く手を振って、別れた。
　施設へと戻る。嘘つきにはなりたくないな、と思いながら。

　２２

「……ん……」
　窓から差し込む光で目が覚めた。カーテンは誰が開けたのだろう。
「目が覚めた？」
　委員長が僕のベッドの横にあるパイプ椅子で本を読んでいた。本のタイトルまでは分からなかったが、分厚い専門書のようだった。
「覚めた。縛られたまま寝るハメにならなくてよかったよ」
「そう、それは良かったわ」
　淡々と言う委員長。
「ところで」
「なに？」
「夜の公園って、意外と目立つのよね。もっと周りを見たほうがいいわ」
　夜、公園……。
「な、何のこと？」
「高遠美野里」
　委員長はそれだけを言う。僕は心臓が飛び出るかと思った。

「えーと……抜け出してゴメン」
「まさか監視されてないとでも思ったのかしら……まぁいいわ。それで、返事を聞いてもいいかしら」
「返事……ね。うん。僕は……僕は、戦うよ」
　委員長が本を閉じた。
「本当に、それでいいのね？」
「うん。決めたんだ。だからもう、迷わない。僕は戦う。アーリと、アーリのボスと」
「それはあなたの父親なのよ？　それでも？」
「もう決めたんだ」
「そう……ありがとう」
　委員長はこちらを見ずに言った。
「そのかわり、条件。尋……大澤尋伍長を突入メンバーに入れて欲しい」
「いいわよ。私が言っておく。代わりにに私も言うわ」
　彼女はこちらに向き直った。
「何を？」
「私も行く。貴方と一緒に」
「え？」
　一瞬何を言ってるか分からなかった。
「だから。……私も行くわ。貴方と一緒に、アーリの巣に」
「な、何言ってるんだよ！　委員長は訓練受けて無いんでしょ？」
「貴方も受けてないじゃない」
「そうだけど、まだ高校生だし」
「貴方もね」
　まぁ、それはその通りだけど。
「えーと……委員長は女の子だし」
「それ、男女差別」
「うぅ……」
　次々と切り返される言葉に僕は何も言えなくなってしまう。
「もう行くって決めたから」
　とどめの一言。こうなったら聞かないのが委員長だ。僕は諦めることにした。まぁ、もともとそんな権限はないのだけど。
「分かったよ。でも、絶対に死なないでね」
「それはこっちのセリフ。……生きて帰って、また学校で会いましょう。あとそれと」
　委員長は僕に指を突きつけた。
「私は学校以外じゃ委員長じゃないの。名前で呼びなさい」
「あ……うん。神月さん、でいいかな」
「……まぁ、それでいいわ。好きなように呼びなさい」

　そういうと委員長……じゃなかった、神月さんはそっぽを向いてしまった。耳が赤い。
「……もしかして神月さん、って呼ばれるのに慣れてない？」
「う、うるさいわね！　その通りよ！」
「神月さん、可愛い」
「え、いや、あ、その……」
　耳の赤みが増した気がする。顔は見えないが、恐らく真っ赤だろう。
「まぁ、それはともかく……出発まで、あとどのくらいの時間があるの？」
　そろそろいじめるのもかわいそうなので話を切り上げた。
「ともかくって……全く。……出発は明日の正午よ」
「思ったより時間かかるんだね」
「メンバーの選抜、装備の調達、ヘリの手配……色々あるから。特にメンバーは、他の街からも召喚するし、ヘリの申請は凄く面倒だから」
　彼女は頭を抱えた。
「大変なのよ。色々と。そんな事言ってる場合じゃないのにね」
　やれやれと持った本で肩を叩く神月さん。
「明日か……それまでに、やることやっとかないと」
「何かやることあったの？」
　意地悪く神月さんは微笑んだ。
「まぁ、色々、ね」
「高遠美野里のところ？」
「え、えと、その、まぁそれはあるかな」
　委員長は鼻で笑う。その笑みはなぜか寂しそうだった。
「許可するわ。明日の正午に施設前集合。いいわね？」
　付け加えるように神月さんは言った。
「見張りはつけないようにしておく。信じてるから。待ってるから」
　彼女は他に一言も発せず、部屋を出ていった。
「……まずは家、かな」
　母さんに言わなければならないことがあるし、服も着替えたい。なにしろ服はズタボロになってしまっているからだ。
「流石に怒られはしないよね……」
　僕は施設を出ると、自宅へと向かった。
街中を歩く。あまり人通りの少ない道を選んだのだけど、すれ違う人達の視線が気になる。
「さっさと帰ろう……」
　人の目を気にしながら歩いているうちに、意外と早く家に着いた。一瞬チャイムを押そうか悩んだが、僕の家だ。その必要も無い。ドアノブを回すと鍵は開いていた。
「ただいまー……」
　ドアを開け、控えめにそう言うと、居間から足音が聞こえた。

「……恭」
　母さんだった。多少やつれてみえる。離れていたのは短い間だったのに。ほんの少しだったのに。
「恭、おかえりなさい」
　それでも、母さんは笑顔でそういってくれた。だとしたら、僕の返事も決まっている。
「ただいま。母さん」

「……もう全部解ってしまったのね」
　服よりも何よりもまず母さんと話がしたくて、僕たちは居間にいた。テーブル越しの母さんの顔は諦観とも達観ともつかないものだった。
「うん。大体分かった……僕がアーリの血をひいてることも、そのせいで僕もアーリになるかもしれないことも、父さんがアーリのボスだってことも」
「そう……」
　俯く母さん。その目からは涙が溢れていた。
「ごめんなさい……」
「母さんのせいじゃないよ。全部……全部仕方のないことだったんだ」
　僕の言葉は、果たして届いているだろうか？
「だから母さん、許して欲しい。僕は……僕は、父さんを……アーリのボスを倒す」
「え……？」
「僕だって、そんなことはしたくない。けど、誰かがやらなくちゃいけないんだったら、そして僕がそれに適正があるんだったら、僕がやる」
「そんな……あの人を、恭が……」
　母さんはよろよろと立ち上がった。
「……父さんは帰ってこない。僕も分からない。けど、僕はやる。決めたんだ」
「私は……あの人と、恭を両方失ってしまうの？」
　僕は下唇を噛み締めた。
「僕は帰ってくる。約束する」
「約束なんて……そんな約束なんて、信じられない！」
　声を荒げる。母さんのそんな姿は滅多に見ない。
「……でも、仕方ないんだ。僕は……僕は、母さんや、周りの皆が危ない目にあってほしくないんだ」
　口をつぐむ母さん。
「何も、世界を救うとか、そんなことを考えてるわけじゃないよ。ただ、周りの人には、笑っていてほしいんだ」
「……大人になったのね、恭」
　母さんは微笑んでいた。涙を流しながら、微笑んでいた。
「もう言うことは無いわ。いってらっしゃい」

「うん。行ってきます、母さん。荷物、持っていくね」
　僕は一端二階の自室に戻ると、服を着替えた。最低限の着替え等を小さめのカバンに詰め込んで、一階に戻る。玄関には母さんが待っていた。
「頑張ってね。恭」
「うん。やれるだけやってみるよ」
　僕はそういうと家を出た。もう、振り返ることはしなかった。

２３

「大澤尋伍長を呼び出し願います」
　僕は軍の駐屯地の前、正門に立っていた。そこで守衛さんに止められたからだ。
「すみませんが現在軍は立て込んでおりまして……お引取り願いたいのですが」
　申し訳なさそうに言う守衛さん。そこで僕はあることを思いだした。
「僕は一之瀬恭です。名前、伝わってませんか？」
「あ、は、はい！　ただいま！」
　守衛さんは守衛室にある電話で何事かを伝え、暫くすると戻ってきた。そして僕の前で直立不動で敬礼をする。
「どうぞお入り下さい！　大澤伍長は会議室にいます！　大変申し訳ありませんがそれまで施設内でお待ちいただいてもよろしいでしょうか！」
「あ、はい。どこまで行っていいんですか？」
「どちらへでもどうぞ！　貴方は左官、いや将官に相当する権限を持ってらっしゃいます！」
「……そこまでか。我ながらすごいなぁ」
「よろしければ案内人をつけますが！」
「そうですね……いや、大丈夫です。適当に歩きます」
「では、恐縮ですがこのプレートをお付け下さい！」
　守衛さんは「一之瀬」と書かれたネームプレートを渡してくれた。僕はそれをストラップで首から下げる。
「では、失礼します！」
　敬礼のまま動かない守衛さん。
「どうも」
　そう言い残し、僕は駐屯地の中に入る。思えば昼間の駐屯地に入るのは初めてだ。看板に貼ってある地図を見て、僕は射撃場へ向かった。行く先々で軍人さんに会う。走ってる人、腕立てをしている人……色んな人がいる。
　射撃場に近付くにつれ火薬音が聞こえるようになってきた。太鼓のような音が連続と、爆竹のような単発音。前者はライフル、後者は拳銃だろう。コンクリートの大きな壁と、分厚い鉄の扉の前に立つ。恐らくこの中が射撃場だろう。ドアを開けると、迷彩服を着た軍人さんたちが思い思いの銃を撃っていた。ライフルはＭ４が多い。拳銃はまちまちだが、口径の大きいオートマチックが多そうだ。奥の方では軽機関銃……ＭＩＮＩＭＩやＭ６０を撃っている人もいた。ＭＩＮＩＭＩはＭ４と同じ５．５６ｍｍ弾を使うマシンガン。分隊支援火器とも言われ、ベルトリンク式の場合装弾数は２００発以上と多い。Ｍ４の３０連マガジンも使える。Ｍ６０は７．６２ｍｍ……Ｍ２１狙撃銃と同じ弾を使うマシンガン。こちらの装弾数も多い。ドアを開けても誰もこちらを向かず、皆集中しているのが分かる。まぁ、射撃場で余所見など言語道断なんだけど。

　僕は一番近くにある射撃ブースを見た。軍人さんがスプリングフィールドＸＤＭ４０……僕のグロック２３と同じ４０Ｓ＆W弾を使う銃を撃っていた。２０メートルは先にある的に弾は面白いように当たる。やがて弾薬を撃ちつくしたのか、スライドが下がってストップした。
　マガジンを抜いて、チャンバーを確認する。スライドを二回引いて、銃を置いて、音を防ぐイヤマフを外した。
「銃、お上手ですね」
　軍人さんは後ろから声をかけた僕に、驚いて振り向いた。一瞬訝しげに僕を見てそれからすぐ、プレートを確認したのか敬礼をした。
「恐縮であります！」
　階級証を見る。この人は……少尉らしい。見た目は若いけど、士官学校卒なんだろうか。
「軍人さんってポリマーフレームオートを嫌うって聞いたことがあるんですけど、そうでもないんですね」
　ポリマーフレームオートとは、ＸＤＭやグロックのように銃のフレーム等にプラスチックを多用したオートマチックのこと。利点は多く、軽くて、暑い場所で熱を持つこともなく、寒い場所で手に張り付く心配も無い。だがやはり強度に不安を持っている人も少なくない。タフな銃を必要とする軍隊ではまだまだ普及が広まっているとは言いがたいのだ。
「はっ！　拳銃は個人の裁量がある程度認められるため、自分はこの銃を選んだのであります！」
「ところで、少尉さん、おいくつなんですか？」
「２４歳であります！」
　二十代半ばで少尉ということは、やはりエリートではあるんだろう。
「銃、教えてくれませんか？　僕、実はそこまで自信なくて」
「自分でよろしければ、謹んでお受けいたします！」
　とりあえず許可が取れたので、僕はイヤマフをつけ、ブース内のテーブルにグロックのマガジンを置く。
「じゃあ、とりあえず１マガジン撃ってみます」
「はい！」
　チャンバー内を確認。銃にマガジンを入れ、スライドを引く。的に向かって構える。両足を肩幅に開いて、腰を落とす。絞り込むように引き金を……引いた。発砲音がして、反動で銃が跳ね上がる。弾は……人の形をした的の、８点の部分に当たった。人体の中心を１０点としているから、まぁまぁではある。続いて撃つ。８点、９点、７点、７点……。スライドがストップした。マガジンを抜き、スライドを引き、チャンバーを確認する。安全確認をして、銃を置くと、僕は振り向いた。
「少尉さん、何かコツみたいなのあるんですか？」
「はっ！　恐れながら、一之瀬様には銃に対する「恐れ」があるかと思います！」
　年上に一之瀬様と呼ばれると、なんだか妙な気分だ。
「恐れ？」

「はい！　我々軍人は「躊躇い無く撃つ」ことを叩き込まれます！　失礼ながら一之瀬様には銃に対する恐怖心があるように見受けられます！無論それは重要でありますが、そのせいで知らず知らずのうちに腕に力が入ってしまっているのだと思われます！」
「恐怖心、かぁ」
「それは一朝一夕ではなかなか克服しがたいのであります！」
「そうですよね……分かりました。お邪魔してすみません」
「はっ！」
　少尉さんはそう言った後、小さく言った。
「軍人としてじゃなくて、個人的に話をしてもいいかな？」
「ええ。大丈夫ですよ」
　僕もその方が肩が凝らずに済む。
「……正直、君のような高校生に死地に赴くのを強制させて申し訳ないと思う。だから言う。躊躇ってはダメなんだ。敵を的だと思って欲しい、撃っているのは人間でもアーリでもなく、金属板だと思うんだ。そう思って、撃つ。そうでないと」
　言葉をさえぎって言う。
「アドバイスありがとうございます。だけど、僕が撃つのはアーリです。そして、その親玉は元人間。それを忘れたら、僕はダメだと思うんです」
「そうか、そうだよな……俺は、先発隊のメンバーにはなれなかったけど、君達の力を信じて、この街を守るよ。必ず生きて帰ってきてくれ。俺達の努力が無駄にならないように」
「はい。ありがとうございます」
　少尉さんは軽く微笑むと、敬礼をした。
「では、失礼いたします！」
　去っていく少尉さん。僕も銃をホルスターにしまうと、射撃場を後にした。
駐屯地内を歩く。一番大きな学校のような建物内に恐らく会議室があるのだろう。何の会議かは大体予想がつく。僕はその建物の入り口の軍人さんにネームプレートを見せ、中に入った。吹き抜けになっている広いロビー。二階から降りてくる迷彩服の隊列の中に尋の姿を見つけ、そちらへ向かう。目に付く人が全て敬礼をする。……ガラじゃないと思うんだけど。
「おーい、尋」
　僕が声をかけると、尋まで敬礼をする。
「はっ！　何のご用件でしょうか！」
「そうだね……ちょっと話がしたいんだけど。二人きりで。……場所、あるかな？」
「今すぐ手配します！」
　近くに居た軍人さんが敬礼と共に僕たちの前を歩いた。
「こちらへどうぞ！」
　そういって尋が僕の前を歩く。僕はその後をついていった。
「ここであります！」
　案内された部屋はカーペットが敷かれていて、ガラスのテーブルと向かい合って革張りのソフ

ァが置かれていた。
「……なんか凄いＶＩＰ待遇……」
　僕は尋に続いて部屋に入った。僕が入ると敬礼をして案内してくれた軍人さんは外に出て行った。
「尋、いいかな」
「はっ！」
「いや、いつも通りでいいから」
「分かった」
　あっという間に変わる、いや、戻る尋。なんだかそれが面白かった。
「尋、明日のメンバーに入れた？」
「どうやらそうらしいな。さっき会議室に呼び出された連中の中で更に選抜されるらしいが……俺はそっちは出なくていいと言われた」
「へぇ。やっぱ神月さん、凄いんだなぁ」
「集められた奴等、半端じゃないぞ。特殊部隊の中でもさらにエリートばっかりだ。一軍人なんて俺ぐらいだったよ」
　やれやれとばかりに尋が首を振る。
「それでも尋は一緒に行ってくれるんでしょ？　ありがとう」
「幼馴染が激戦地に行くのに、黙ってみてるほど腰抜けじゃないからな。それに……」
「それに？」
　何か含みのある言い方が気になる。
「いや、なんでもない」
　そっぽを向いてしまう尋。そんな姿をはじめて見た。
「えーと……神月さんが気になる、とか？」
「なっ……そんなことはない！」
　顔が真っ赤になっている。
「すげぇ分かりやすいね、尋……」
「それはともかく！　なんで態々俺を訪ねてきた？　もっと他に行くところがあるだろう？」
　露骨に話をそらされたが、それはスルーしておく。
「いや、尋に言っておきたかったんだ。ありがとうって」
　尋を真っ直ぐに見据えて言う。
「そうか……いや、その言葉はしまっておけ。無事に帰ってこれて、初めて成功だ」
　彼の目は遠くを見ていた。数多の命が散っていくのを見ている彼。それを思い出しているのかもしれない。
「うん。そうだね……絶対に生きて帰ろう、尋」
　力強く頷く尋。それは、昔の僕のヒーローだった少年の顔になっていた。
「じゃあ、また明日」
「ああ。またな」

　僕は部屋を出て、施設を歩き、ゲートまで向かう。守衛さんにプレートを返す。
「お疲れ様でした！」
　敬礼をする守衛さん。やっぱりこの扱いは慣れないなぁ、と僕は一人苦笑した。

　２４

「こんばんは、木村さん」
「あら、一之瀬君じゃない。最近よく来るわねぇ」
　僕は銃砲店のドアを開けながら挨拶をした。もう午後八時だ。クラスメートの家とか、そういうったところを挨拶していたらそんな時間になってしまった。
「時間、大丈夫ですか？」
「ウチは九時まで営業中。どうぞご遠慮なく」
　僕はそれを聞いて中に入った。
「どう？　グロック、調子いい？」
「そうですね。使いやすいし、威力も必要十分だと思います」
「そう、それはよかった」
　微笑む木村さん。
「で、もう一個の銃は？　飾りにはなってないよね？」
　笑みが少し意地悪になった。
「そう。それなんです。今日はその弾を買いに来ました。駐屯地内でも流石にこの弾は無いそうです。４０Ｓ＆Ｗはあるみたいですが」
「……え？」
　木村さんが少し固まる。
「Ｍ５００の弾を買いに来たんです。アーリの巣に行くのに、必要ですから」
「な、何を言ってるの？」
「僕は、アーリのボスを倒しに行きます」
「そういえば、軍隊から火器と弾薬の注文があったけど……」
「多分、僕たちが使う分でしょう」
　木村さんの顔が引き締まる。
「……本当の話なのね？」
「冗談でこんなこと言えませんよ」
　こんなに真剣な顔が出来る人だったのか、と僕は失礼なことを考えてしまった。
「私は、昔軍属だった」
　木村さんは口調を変えてそう言った。
「部隊はアーリに襲われて全滅した。私も大怪我を負った。軍を去ることしか道は無かった。だけど、アーリが許せなかった。だから、銃砲店をやってるの」
「……知りませんでした」

「勿論、誰にも言ってなかったからね。いいよ。うちの店にある弾、あるだけ持っていっていいよ」
　木村さんは僕に背を向けてカウンターの奥の戸棚を開いた。
「え、いや、買いますよ！　一応資金も出てますし！」
「いいのいいの。どうせ撃つ人も殆どいないんだし。あ、グロックのマガジンもあげるね」
「でも……」
「なら、出世払いでいいわよ。だから……帰ってきなさい。必ず」
　振り向いた木村さんの頬には、一筋の涙があった。
「勝たないでいい。負けないで」
　Ｍ５００の弾薬を四箱、紙袋に入れて渡してくれた。ずっしりと重い、２００発の弾が入った紙袋。
「そうですね……ありがとうございます」
　僕はそれを受け取る。弾丸だけではない重さを実感した。
「じゃあ、いってらっしゃい」
「はい！」
　僕はドアを開けて、店を出た。
「さて……施設に帰るか」
　今から家に戻ったら決心が鈍ってしまいそうで怖かった。夜の街を歩く。人通りは殆ど無い。
「もしアーリがいなくなったなら、夜の街ももっと明るくなるんだろうな……」
　そんなことを考えているともう施設についてしまった。入り口の門をくぐり、中に入る。寄宿舎に割り振られた自室に戻る前に別棟にある訓練室へと向かった。
「ここ、かな……」
　体育館のようなところに出た。この施設に勤務している警備員さんが訓練していた。それを取り仕切っている様に見えた人に声をかける。
「すいません、明日に向けて、装備が欲しいんですが」
「は、はい！　今すぐ許可を確認します！」
　飛んでいったその人は直ぐに戻ってきた。ちょっと前、僕は拘束されていた身分だったんだけどなぁ。
「はっ！　何を調達すればよろしいでしょうか！」
「えーと……」
　数分後、僕は大量の武器や装備品を持って自室へと向かっていた。部屋に入って、床にそれらを置く。バレルを極限まで切り詰めたＣＱＢモデルと言われるＭ４Ａ１、つまりはＭ４の改良型に、マガジン多数。タクティカルベストと呼ばれるポケットが多いベストに、破片手榴弾三個、焼夷手榴弾二個。焼夷手榴弾は炎を発する爆弾だ。他にストライダーと呼ばれる大型のコンバットナイフに、小型のシースナイフ……鞘に入れるタイプのナイフが少し。そしてＭ４Ａ１用の５．５６ｍｍ弾、グロック２３用の４０Ｓ＆Ｗ弾多数に、ＰＰＫ用３２ＡＣＰ弾少々。ライフルははレイルシステム……オプションを取り付ける装置を積んでいる最新型で、それに装着す

るフォアグリップやフラッシュライト、レーザーポインターやダットサイト等もある。Ｍ５００の弾とそのスピードローダー、グロックのマガジンは自腹だ。木村さんはタダでくれたけど。
　一式を装着して、使い方を確認し、抜き撃ちの練習などをする。ライフルもナイフも格闘術も尋から教わった初歩的なものだけど、知らないよりはいいし、練習しないよりはいい。
「結構重いな……」
　タクティカルベストを着て、装備を身につけてみた。ボディアーマー、つまりは防弾チョッキや防刃チョッキをつけてない分だけ軽いのだが、それでも僕の体格と体力ではかなりギリギリのラインだ。
「うーん。手榴弾何個か置いていこうかな……」
　それも考えたが、いざという時に困るかもしれない。結局、持って行く事に決めた。装備一式を確認し、それを外す。家から持ってきたパジャマに着替えて僕は休むことにした。もうそろそろ日付が変わる。明日に備えなければならないのにずいぶん遅くまで起きてしまった。
　ベッドに入って部屋の電気を消す。目を閉じれば疲れで直ぐに眠れる……と思っていた。寝れるはずが無かった。明日。明日全てが終わる。成功でも、失敗でも。そして、あえて今日行かなかった高遠さんの家。あの公園で約束をした。それで十分だったのかもしれない。けれど、やはり。
僕は自分の荷物を漁った。ペンとメモ帳。あまり気は進まないが、今はより好みをしている場合じゃない。ベッドから下り、机のスタンドの電気を入れる。
「まぁ、こんなものかな……」
　暫くして、用事が終わったのでベッドへ戻った。それは、夢なのか、それとも現実だったのか。
――……お前、自分の親を殺すのか？
　暗闇の中で、「俺」が語りかける。
「そうなるね。会ったこともない親だけど……それでも、倒さなきゃいけないんだ」
――お前もいずれアーリになるのに、か？　親父さんを倒せばお前が次の王になるだけなのに？
「僕はならないよ」
――はっ！　無理だな。自分の血に逆らえるヤツなんていない！
　そういって笑う「俺」を僕はまっすぐ見据えた。
「無理じゃないさ。だって僕は……」
　次の言葉を発した直後、僕は光の渦に飲み込まれた。

「おはよう、一之瀬恭」
「……おはよう」
　目をあけると月さんが居た。なぜ毎回この人は無断で人の部屋に入るのか。
「今何時？」
「九時。もうあまり時間はないわよ」
　僕は布団から飛び起きた。

「ちょ、ちょっと待ってて！　行くところがあるんだ！」
「え？　正午まであまり時間はないわよ！」
「急ぐから！」
　神月さんが頭をかく。
「全く……早くしなさいよ！」
「ごめん！　で、その……」
「何？　急いで欲しいんだけど？」
　思いっきり睨まれた。だけど……。
「……いや、着替えるから、席外して欲しいんだけど……」
　みるみる神月さんの顔が赤くなる。
「ば……バカ！」
　彼女は部屋を飛び出した。
「さて、とりあえず着替えないと……」
　僕はパジャマを脱ぐと普段着……青いジーンズと白いシャツ、薄いグレーのパーカーを着て、荷物を確認すると施設を飛び出した。目的地まで全速力で走る。用件を済ますと僕は早々に立ち去った。腕時計を見ると十一時だった。間に合うだろうが、やっぱり怒られはするだろうな、と苦笑した。
「遅い！」
「あいたっ！」
　施設に戻ると門の前で委員長にチョップを食らわされた。時計を見ると十一時四十三分。その光景を見て黒い服に身を包んだ体格のいい男性達が爆笑する。装備は万全、といった感じだ。八名。内の一人は尋だった。銃は僕と同じＭ４Ａ１のＣＱＢモデル。一点式と呼ばれる新型のスリング……銃の固定具を装備している。これなら緊急時に直ぐに銃を落とさずハンドガンに切り替えられる。ハンドガンは４５口径のコルト・ガバメントのカスタムだった。ライフルのレイルにはオプション。フォアグリップは殆どの人が着けているが、あとはまちまちだ。ダットサイトやレーザーポインター、フラッシュライト……。その辺りは個人の裁量やポジションによって変わるのだろう。尋はフォアグリップにダットサイトというスタンダードな組み合わせだった。また、二名は銃が違った。内の一名はＭ２１にスコープを着けていた。恐らく中距離狙撃用。もう一人はＭ２４９……ＭＩＮＩＭＩと呼ばれる分隊支援火器を持っていた。
　他の装備は共通のようで、全員プレート入りのボディアーマーを着ている。その重さは２０キロを超える。しかも、その上にマガジンや手榴弾が山のように装着されているのだ。僕とは体の構造が違うのかもしれない。一応、同じ男なのだけれど。
「さっさと準備してきなさい！」
　思わず見入っていると委員長にまた怒られた。神月さんは防弾レベルの低い軽量の防弾・防刃チョッキを着て、装備は４５口径のカスタムガバメントだけのようだ。
「分かったって」
　僕は部屋に戻り、昨日のうちに準備したベストを身に着ける。袖を通すとき、気が引き締まる

。ライフルにはフォアグリップとダットサイトをつけた。スリングは一点式だが、携行する予備のマガジンは３つだけ。他のメンバーは少なくとも９個は持っている。その代わり、ハンドガンの数とそのマガジンの数が多いのだけれど。
完全装備すると、やはり重い。ずっしりとくる感じだ。改めて実感する。この重みは、銃の重みだけじゃないことを。思わず体が震える。自分の血が騒がないように抑える。鏡を見ると、僕の目は黒いまま。大丈夫。僕はまだ人間だ。
「もうすぐだ……もうすぐ、終わる……」
　それまで持つだろうか。いや、持たせなければならないんだ。僕は部屋を出て、廊下を走り、集合場所の広場へと向かった。

　２５

「うわぁ……稼動してるところ、はじめて見たよ……」
　広場には先ほどはなかったヘリコプターがスタンバイしていた。爆音と風で声がかき消される。もう他のメンバーの積み込みは終わったらしい。神月さんだけが腕組みをして待っていた。
「全く、ミーティングも無しで作戦に挑むなんて無謀すぎるわよ！」
「ゴメン。やっておきたいことがあったんだ。どうしても」
「まぁいいわ。早く乗って！　ガソリンは超高級品なのよ！」
　神月さんは機内に乗り込むと僕に手を差し出した。僕はその手を掴み、機内に乗り込む。入ると、僕はドアを閉めようとして……閉め方が分からないことに気付いた。そうしているとすぐ横に居たＭＩＮＩＭＩを持った軍人さんが閉めてくれた。
「ありがとうございます」
　僕の言葉に、フランクな笑みで返してくれた。
「いえ！　本官は須永中尉と申します！　よろしくお願いします！」
「あ、一之瀬恭です……階級は……えーと。無いんですけど、将官扱いらしいです」
「はい！　ご活躍、期待しております！」
　やはり上官扱いは慣れない。僕のほうが遥かに年下なのに。僕は周りを見て、大きな声で言った。
「僕はあくまでオブザーバーです。呼び捨てか、せいぜい「さん」付けでいいですから！」
「無駄口たたいてないの！　出発して！」
　僕としては気を利かせたつもりだったのだが、怒られてしまった。
「了解。テイクオフ」
　パイロットが言うと、機体が持ち上がった。初めて味わう浮遊感に少し戸惑いながら、僕はシートに座って、ベルトを締めた。ヘリはどんどん高度を増していって、北北東に向けて飛行した。
「神月さん、こっちの方向で合ってるの？　まだ何も感じないんだけど……」
　僕はレーダー役なのに、そんなものでいいのだろうか。

「いいのよ。大まかな場所は分かってるし、そこに着くまで何時間も飛ばなきゃだから」
「そう……」
　狭い機内で、彼女は声を張り上げる。
「任務は簡単。私が指揮官……まぁ、本当は指揮官代理なんだけど、実質的には指揮官。オブザーバーが一之瀬恭。私達二人は最優先事項として防衛をお願いするわ。現地に着いたら、パイロット二名はヘリで待機。私達の護衛に二人……須永中尉に大澤伍長。後方支援に狙撃手とその護衛兼観測手。残りは先発隊で四人一組。大丈夫？」
「了！」
　八人分の声が響く。了解、という意味らしい。
「補給は無いわよ。せいぜいこのヘリに積んでる少しの弾薬ぐらいだけ。あと、任務を達成するためなら人員は切り捨てるわ。いい？」
「了！」
　また響いた。気合十分……というか、少しも気後れしないのが凄いと思う。これが歴戦の軍人たる所以なのだろう。尋も「一兵士」とは言っていたが、実戦経験なら負けてないはずだ。
「それでは、無線着用！　各自装備の点検、確認を怠らないこと！　後は何かあったら言うわね。質問が無ければ臨時ミーティング終了！」
　暫く皆が無言なのを確認すると、彼女は席へ戻った。機内では誰も喋るものはいなかった。僕はこんなにも緊張しているのに、平気なのだろうか、と思ってしまう。一秒一秒が永遠に感じられる。時の流れがおかしくなったみたいだ。沈黙の中、何時間の時が流れただろう。
「神月指揮官、異常事態！」
　僕の無線にも聴こえてきた。他のメンバーもそうらしい。オープンチャンネルだ。急に空気が冷えたように感じられて周りを見渡すと、全員顔つきが変わっていた。空気が冷えたのは皆が発する殺気のせいだろうか。アーリのものより鋭い。
「どうしたの！」
　神月さんの声からは震えを必死に押し殺しているのが分かった。
「レーダー及び目視にて確認！　多数のアーリが様々な街に向かっています！」
　僕はベルトを外して立ち上がり、窓の外を見た。
「一之瀬恭、勝手にシートベルトを……」
「そんな場合じゃない！」
　アーリの大群が、すごいスピードで街に向かっていた。この街のことは僕は知らないけど、どんなに装備がよくたってあの数は到底防ぎきれるものじゃない。
「なんでだ……なんでなんだよ！　なんでこんな！」
　目の前で殺戮が起ころうとしているのに、止める術が無い。
「先手をうたれたか、もしくは向こうが気付いたか……」
　呟く声が聴こえた。
「……どういうこと？」
　僕は神月さんを、自然と問い詰めるふうになった。

「自分達のボスが倒されれば、自分達がどうなるか分からない。だから、アーリは先に人間を」
「それじゃあ、僕が動いたからこうなったのか？」
　彼女の言葉を遮り、僕は声を荒げた。
「その可能性は否定できないわね」
　神月さんは無感情に言った。
「僕を下ろしてよ！　あのアーリ達を……！」
「達を、どうするの？」
　冷ややかな目。その目が僕の中の憤りを加速させる。しかし、言い返せない。
「今更間に合わない。私達に出来るのは、一刻も早くアーリの親玉を倒すだけよ」
「そんな、そんなことって……！」
　正論だ。何も言い返せない。悔しい。あの街に住んでいる人々に罪は無いのに。
「くそっ……絶対にアーリを根絶やしに……」
　言いかけた時、ドクン、と心臓の音がうるさく聞こえた。
――あはは。そうだ。もっと憎め。もっと怒れ。それがお前の……いや、人間の本質なんだよ！
「くっ……！」
　思わず、胸を掴む。が、それで鼓動が止まるわけではない。
「どうしたの、一之瀬恭！」
「なんでもない……大丈夫……」
　窓ガラスに映った自分を見ると、目の色が赤くなったり、黒くなったりしている。アーリと人間の血がせめぎあっているんだ。周りの景色が歪む。ダメだ。ダメなんだ。僕は人間なんだ。落ち着け。抑えろ。「俺」をねじ伏せるんだ！　僕は頭を抱えてそう何度も繰り返した。
――ちっ。また後でな。
　それが聞こえると同時に、僕の苦痛は消え去った。
「大丈夫でありますか？」
　顔を上げると、そこには尋の顔があった。
「ありがとう……多分、もう大丈夫」
　僕はシートに戻り、ベルトを再度締めた。メンバーが心配そうな顔をしている。
「お騒がせしました。すみません。大丈夫です」
　その言葉を聞いて皆が安堵するのが分かった。
「一刻も早くアーリの巣に行きましょう。そろそろ、僕もなんとなくだけど……感じるようになってきました。……何かの気配を」
　ヘリはその間も進んでいく。だんだん街の見える数が減ってきた。そして、一時間も立つとすっかり無くなってしまった。その代わりに見えるのは……。
「これって……ビル？」
　僕も資料でしか見たことのない、高層建造物。アーリの数が増える前にはたくさんあったらしいが、資材も乏しい今となっては見ることもなくなってしまった。だんだん建物が増えていく。僕はそれに違和感を感じた。

「神月さん、なんでこの辺りは建物が残ってるのかな？　何でアーリに壊されなかったんだろうね？」
「分からない。私も来たのは初めて……」
　下の景色は、まるで天国のようだった。舗装され整備された道路に、車が多数。建造物も立派で、綺麗だ。ただ、そこにいるのは天使ではなく、地獄からの使者、アーリ。そして、なんとなく……なんとなくだけど、僕を呼んでいる声が聞こえるような気がする。それが強くなっていく。
「一之瀬恭、どう？」
　顔を覗き込まれた。僕は妙な感覚を感じていた。何か、呼ばれているような……。
「そうだね……近いと思う……。この近くじゃないかな……下りたら、もっと詳しく分かるかも」
「そう……了解。パイロット、この近くにヘリを下ろせそうな場所は？」
「あの建造物の屋上がなんとか使えそうですが」
　それは一際高いビルだった。
「分かった。着けてくれる？」
「了」
　そこへ向かうヘリコプター。機内を振り返ると、誰にも言われないのに戦闘準備をするメンバー達。僕は、胸ポケットのワルサーＰＰＫを握り締めた。シャキン、という音がいくつも響く。銃に弾を装填したのだ。慌ててぼくも装填しようとして、須永中尉に止められた。
「一之瀬さんは、アーリとの交戦時、自衛のときのみ装填してください。そのほかの場合は本官たちが護衛します」
　僕は頷くと、コッキングハンドルから手を離した。大丈夫だ。この人たちなら、きっと僕達全員、生還できる。そんな希望を抱いた。
「屋上、アーリの姿確認できません」
「着陸準備！」
　神月さんが言うと、ヘリは高度を下げていった。慎重に屋上に着陸する。それと同時にドアが開き、ヘリから皆飛び出して、様々な方向に銃を向ける。極限まで訓練された人間は、こんな動きが出来るのか、と場違いなことを思った。
「クリア！」
　皆が大声でそう叫ぶ。安全確保、という意味だ。安全が確認された後で僕がヘリコプターから降りると、その途端また心臓が大きく鳴った。
「くそっ、まだだ、もう少し……！」
　心臓の音がうるさい。負けてたまるか、なんとか持ちこたえるんだ。自分にそう言い聞かせて顔を上げる。
「一之瀬さん、どうですか？　親玉の場所は分かりますか？」
　声をかけてくれたのは尋だった。名目上さん付けだけど。
「……多分あっちの方です。なんとなくですけど」

　皆がそちらを向く。そちらには一際高いビルがあった。
「もしかして……あそこに？」
　神月さんが確認する。
「なんとなく、だけどね」
　そうとしか言いようが無い。ただ、引き寄せられるのは確かだ。
「とりあえず、ここのビルを下りましょう。それから、徒歩で移動。いい？」
「了！」
　銃に装填したまま、セフティをかけて、慎重に慎重に屋上から階下へ下りるドアを開ける先発隊。僕や神月さん、尋、須永中尉とスナイパー組は後ろから様子を見ていた。もちろん、銃を肌身離さず、だが。
ゆっくりとドアノブに手を伸ばす先発隊。ドアに鍵がかかってないことを確認すると、それを静かに開けた。すぐに突入が始まる。僕が続こうとすると、神月さんに肩を掴まれた。
「私達は先発隊が安全を確保してから入るの」
「あ、そうか……でも、僕も戦わなきゃ」
　大きなため息をつかれた。
「いいの。オブザーバーなんだから。それよりも自分の身のことを考えて。いい？」
「……分かった」
　なんとなく腑に落ちないが、仕方ない。僕は黙って首を縦に振った。
「クリア！」
　暫くすると無線を通して声が聞こえた。
「さぁ、行くわよ」
　僕たちもようやく、ビルの内部に入った。当然ながら電気はなく、尋と須永中尉の持っていた軍用ライトが明かりだった。屋上からの階段を下り、二階分ほど下がると、先発隊の背中が見えた。
「では、また先に行って確保します」
「よろしくね」
　神月さんと先発隊のリーダーだろう人の会話が聞こえた。暫くするとまた先行する四人が動く。それを繰り返す。階段の表示を見るとこのビルは三十階建てらしい。現在は十二階まで下りてきた。最初はおっかなびっくりだった僕や神月さんも少しずつ慣れてきた。
　その時だった。
「こちらヘリ、現在、様々な街でアーリとの交戦を確認。戦況は不明」
　僕はヘリで見たアーリの大群を思い出した。あの大群と、人間が戦えている？
「こちら一之瀬。僕たちの街はどうなってますか？」
　本来は神月さんの許可がいるのだろうけど、つい言ってしまった。しかし、お咎めは無かった。
「少々お待ち下さい……どうやら、交戦に備えて準備中の模様」
　交戦が始まってしまったら、大変なことになる。どうか、間に合って欲しい。いや、間に合わ

せなければ。僕と神月さんは顔を見合わせると頷いた。
「全員、速度を速める！　司令官を倒せばアーリが弱体化するかもしれない！　私、及びオブザーバーも必要があれば参戦する！　いいわね！」
　思いっきりの声で神月さんが言った。
「了！」
　僕も含め、全員の声が揃う。皆でアイコンタクトをすると、階段を一気に駆け下りた。

　ビルの階段を下りきって、一階に到着した。ガラスで出来ている正面ドアを力技でスライドさせる。先発隊四人で二人ずつに別れ、掛け声とともに動かす。ドアはなんとか開き、僕たちはビル街へと降り立った。銃を構えながら移動する。街は静かなものだった。目的の一番高いビルまでは……二、三キロだろう。
「拍子抜けって感じね」
「でも、なんだか嫌な感じがするんだ……気を抜かない方がいい」
　僕は神月さんに注意を促した。しかし、正直僕も意外に思っている。ゾーバのような強力なアーリがたくさんいるものだと思っていた。
「……こちら先発。全員止まれ！」
　いきなりの無線に体を固めた。握っていた銃に力が入る。銃口は左下を向いたままだ。先発隊に当たったら目も当てられない。僕たちの５０メートルほど先を行く先発隊は前に銃を構えている。そのせいで先になにがあるのか分からない。いや、アーリだろうとは思っていた。しかし、期待は裏切られた。
「人間です！　人間がいました！」
　無線越しに聴こえる声は驚きと喜びが半々といった感じだった。
「おかしいな、なんで人間がここに……？」
　神月さんがぼやく。僕はそれを聞いて走り出した。
「あ、ちょっと！」
　静止を振り切り走り出す。ほどなく前の四人に追いついた。
　見た目は十代前半の少年のように見えた。黒髪黒目で、着ている服も普通だ。だが、何か違和感を感じる。本能的にちぐはぐな感じがする。
「おい、君、大丈夫か？　なんでここに？」
　隊の一人が銃を下ろし、近付いた。
「少し、はぐれてしまって」
「はぐれた？　誰に？」
　そこで感じたもの。それは、ヘリの中で感じた……。
「いけない！　下がれ！」
　僕が言うのが遅すぎた。近付いた隊員の背中に何かが生えていた。突起物それは……赤く濡れた、刃だった。
「ぐっ、かはっ……」

　うめき声が無線越しに聞こえる。他のメンバーが銃を構え、安全装置を外す。
「……仲間のアーリと、ですよ」
　刃が抜き取られた。少年は右手を真っ赤に染めて、大型のナイフを持っていた。僕を見ると不敵に笑う。
「ぐうっ！」
　その瞬間、また胸の鼓動が大きくなる。
「お前、まさか……」
　僕が問うと、それは答えた。
「ああ。俺はアーリですよ。お仲間さん。もっとも、あんたと違って純血のアーリだけどね。人間型のアーリってレアでしょ？」
　そいつは笑いながらそう言って、右手のナイフを振って血を飛ばした。刺されたメンバーはピクリとも動かない。
「状況開始！　新種の人間型アーリが一体！」
　僕は鼓動を抑えるため、胸を抑えながらオープンチャンネルで叫んだ。
「人間型の、アーリ……？」
　神月さんの声が聞こえたが、反応している暇は無い。人間だと思われたあのアーリの目は、真っ赤になっていた。
「前衛、応戦します！」
　アサルトライフルの連射音が響く。普通の人間なら反応すら出来ずに穴だらけになっているだろう。しかし、僕は見てしまった。銃弾を、まるで投げられたボールのように易々とかわすそのアーリを。そのアーリは一直線にこちらに向かってきた。狙いは僕だ！とっさにＭ４Ａ１を手から放し、ストライダーナイフを鞘から抜く。ナイフを逆手に握って、正確に左胸を狙って突き出されたナイフをギリギリで受け止めた。
「へぇ、さすが同属」
「僕はお前らとは違う！」
　尋に教えてもらった前蹴りを腹に叩き込む。少しうめいてアーリが後ろに下がる。が、思ったよりもダメージはなさそうだ。それにあの体。まるで鉄板を蹴ったみたいだ。
「はは。あまり効かないね。それじゃあ、まずは数を減らすかな」
　そう言うと、俊敏な動きで一番近くにいたメンバーの後ろに回りこむと、首筋をナイフで欠き切った。噴水のように噴き出す鮮血。唖然とする僕達。そして、その後の焼けるような怒り。しかし、僕にはどうすることも出来ない。力が足りない。なら、方法はひとつしかない。「僕」でなければいい。
「三人目！」
　そう言いながら動くアーリを、それ以上のスピードで動き、ナイフで右腕を切り落とした影があった。
「ははは。遅い遅い。人間の体がベースってのもいいもんだぜ？」
――あまり暴れるなよ。

「分かってるって」
　そう。僕は「俺」に体を貸した。それしか方法が無かった。例えアーリ化が進もうとも、これ以上人が死ぬのを見ていられなかった。
「うー。痛いなぁ」
　切り落としたアーリの手はすぐに灰のようになって風化し、またすぐに手が生えてきた。
「化け物同士、仲良くやろうよ？　ね？」
　新しく生えた手でナイフを拾いながらアーリはそう言う。
「俺は自分が一番じゃねーと嫌なんだよ」
　そう言いながら右腕でナイフを突き出す。ナイフとナイフの当たる金属音が響く。
「危ないなぁ」
　アーリは「俺」のナイフを自らのナイフで受け止めた。しかし。
「ひっかかったな。バカが」
　「俺」の左手にはグロックが握られていた。アーリの頭を狙って何発も弾丸を叩き込む。一発当たるたび、アーリの頭が跳ねた。グロックの残弾が尽き、銃がホールドオープンしてから、ようやく僕は体を取り戻した。
　アーリは脳漿と真っ赤な血を流しながら、地面に伏していたが、すぐに灰のようになって風化した。
「……人間型のアーリは死ぬと灰になるのね。他の生物のコピーじゃなく、人間のみが持つ悪意を、悪意そのものを純粋に実体化させたから……？」
　神月さんが冷静に分析をしている。その横で、僕は立ち尽くしていた。それも一瞬のこと。
「くそっ！」
　大声に振り向くと、殺された二人をメンバー達が囲んでいた。僕はそれを見て下唇を噛む。
「僕がもっと早く気づけば、もっと早く体を貸していたら……」
　呟くと、肩を叩かれた。
「お前のせいじゃない。よくやった」
　尋もまた、苦虫を噛み潰したような顔をしていた。
「人間型のアーリ……知能が高いみたいね。……残念だけど、遺体は破棄します。作戦続行」
　神月さんの言葉は冷酷に聞こえるかもしれない。僕は隊員の返事が不安だった。しかし、それも杞憂に終わる。
「……了！」
　立ち上がったメンバー達の目には光が戻っている。　僕達は前へ進む。後には残された体が二つ、地面に横たわっているだけだった。

２６

　前以上に注意深く、それでいて素早く行動する。僕もアーリの気配は感じなかった。
「一之瀬恭、少し後方に下がりなさい。話がある」

　神月さんの声。秘匿チャンネルだった。僕は指示に従う。
「何かな？」
　僕が小声で尋ねると、神月さんは言った。
「さっきは無事だったからよかったけど、前線には立たないで」
　その言葉に、少し引っかかる。
「誰かが死ぬんだよ？　僕が出れば被害は抑えられるかもしれないのに？」
「貴方はジョーカーなの。切り札なのよ。分かって」
　前も同じ事を言われた。
「……了解。だけど、ある程度は僕の意思を尊重して欲しい」
「分かったわ。じゃあ、簡潔に。死なないでね」
「了」
　軍人さんの真似をする。似合ってないのか、神月さんが少し笑った、気がした。その時だった。静まり返ったビル街に、突如発砲音が響いた。メンバーの誰かが誤射でもしたのだろうか。いや、彼らほどの腕ならそれはありえない。なら……。
　気付いたときにはもう遅く、先発隊の一人が頭から血を噴出しながら倒れるところだった。
「状況！」
　神月さんの声に皆が思い思いの方向に銃を向ける。
「一之瀬恭、アーリを感じる？」
「いや、分からない！　なんでだ！」
　僕が焦って怒鳴るのを須永さんが手で制した。
「気配を隠すのに長けてるんです。とりあえずビルの中に入りましょう！」
　近くにあったビルの入り口に皆で走る。途中、銃声が何度も響いた。一番前を走っていた僕がグロックでガラスドアの四方を撃ち、穴を開け、蹴破る。転がり込むように入ったビル内部。しかし気づけば、観測手がいなかった。
「おい！　どこだ！」
　狙撃手が大声を上げると、無線が入った。
「……そこから１０メートルの茂みだ。撃たれた。アーマーの隙間から入ったらしい。腹だ。助からない」
　どうして今まで気づけなかったのだろう。ドアから１０メートルほど離れた茂みに、メンバーが座り込んでいた。周囲にはもう血だまりが出来ていた。
「バカを言うな！」
　彼が叫ぶ。
「敵は向かい側のビルの屋上……俺は無視しろ」
「そんなことできるか！　お前は俺のバディだろ！」
　悲痛な叫びだった。
「相手の弾をかいくぐりながら、俺のところまで来て、担いで戻るなんて無理なのは分かるだろう」

　たった１０メートル。その距離がはるか遠くに感じられる。
「残念だけど、その通りね」
　横から神月さんが言葉を発する。僕は階段を駆け上ろうとした。
「今からじゃ間に合わないわよ？　屋上まで行っても。それに絶対に撃たれるわね」
　どこまで冷静で、正論を言うんだ。この人は……でも、理屈じゃ片付かない！
「僕が気づかなかったから一人亡くなった！　もう被害は出したくない！」
　知らず知らず声が大きくなった。神月さんの体がビクッと震えた。
「ぐあっ！」
　開いたままの無線にうめき声が聞こえる。逃げ遅れた観測手の足が撃たれたのだ。スナイパーは目的を一発で殺したりはしない。こうやって苦しむ姿を見せ付けて、救助に来た仲間を撃つのだ。
「くそ……！」
　狙撃手が呻くように悪態をつく。
「……もういい。俺の失態は、俺でケリをつける」
　観測手は腰のガバメントに手を伸ばし、スライドを引いた。ケリをつける。その言葉の意味はひとつ。
「おい！　やめろ！」
　狙撃手が叫ぶと同時に一発の銃声が響いた。４５ＡＣＰ弾の薬きょうが地面にぶつかって跳ね、転がった。
「あ、ああ……畜生……畜生畜生畜生！」
　Ｍ２１を持った狙撃手は、反対側のビルの屋上に向けてフルオートで銃を乱射した。
「やめなさい！　弾の無駄！」
　神月さんの声が届かないように彼は発砲し続ける。目には涙がにじんでいた。
　やがて弾が切れると、彼は予備のマガジンに手を伸ばした。それを、須永中尉が掴んだ。
「……仇はとる。必ずだ。だから落ち着け」
「う、あ……あああ！」
　スナイパーは、床に這いつくばって涙を流す。僕はやりきれない思いでいっぱいだった。気付けば口が動いていた。
「ライフルを貸して下さい。僕があいつを倒します」
「え……？」
　泣き腫らした目でうずくまっていた狙撃手が顔を上げる。
「狙撃用ライフルを貸してください。僕がやります」
「そんな……狙撃訓練なんて受けてないでしょ！」
　神月さんの言葉はもっともだったが、そんなものはどうでもよかった。怒りを抑えるので、アーリの血を抑えるので精一杯だった。
「借りますよ。マガジンも新しいの一個持って行きます」
　僕は半ば奪い取るように落ちていたＭ１４とマガジンを手にし、階段に向かった。

「まて、俺が！」
　尋が手を伸ばしてくれた。が、僕は振り向かなかった。屋上までの長い階段を一気に駆け上る。窓が無いから撃たれる心配は無い。暗闇にアーリが潜んでいるかもしれない、なんてそのときの僕は思いもしなかった。やっとたどり着いた屋上へのドア。それを慎重に開ける……と直ぐ、僕の顔の横に着弾した。慌てて身を隠す。
「……待ち伏せか。そりゃそうだよな……」
　僕がスコープ越しにこっそり対岸の屋上を見る。そこにはスナイパーのアーリ……いや、確定はないけど、きっとアーリ……がこちらを狙っていた。
「近づけない。狙撃も出来ない。……なら！」
　僕は思い切ってドアを開け放した。Ｍ１４は床において、切り詰められたＭ４Ａ１を撃ちながら突進する。着弾が止んだ。向こうも身を隠している。今がチャンスだ。
「吹っ飛べ！」
　僕は手榴弾のピンを抜き、思いっきり投げた。向こう側にそれが届いたのが見え、爆発。爆風が僕の所まで届く。煙が舞っている中、スコープ越しに向こうを見ると、ズタズタになって、ところどころ灰化しているアーリがそれでも銃に手をかけようとしていた。僕はスコープを覗いて、それに照準を合わせた。引き金を引いた。一発の銃声と共に、完全にアーリは灰になった。それでも、亡くなった二人のメンバーは帰ってこない。僕は、やりきれない気持ちでいっぱいだった。　階下に下りていくと、隊員が揃っていた。
「ありがとうございます……」
　スナイパーが消え入りそうな声で言う。
「無茶しないでよ。もう」
　神月さんは不機嫌だった。まぁ、それはそうだろう。それからメンバーに向き直った。
「スナイパーと、先発隊の残りはヘリに戻って」
「な、俺はまだ戦えます！」
　先発役の隊員が声をあげた。
「スナイパーを護衛しつつヘリに戻って。いい？」
「……了」
　隊員は不満そうに、それでも頷く。神月さんは僕に耳打ちをした。
「狙撃手はもう使い物にならない。だったら、ヘリにもどす。残りは私達がやる。いいわね？」
　僕も黙って頷く。その後、二人はヘリコプターが待機しているビルへと向かった。僕は彼らが無事に戻れるように祈ることしか出来なかった。
「さて、残りは四名……」
　退却するメンバーを見送った後、僕達は確認した。
「私、須永中尉、大澤伍長、一之瀬恭。……軍人は二名。どうする？　かなり危険だとは思うけど」
「本官に不安はありません」
　須永中尉が言う。

「同じくです」
　尋も言った。
「急ごう。こうしてる間にも街が潰されるかもしれない」
　僕も答えた。半分は自分に言い聞かせているけれど。
「……了解。けれど、私は正直戦力になるか分からない。それでもいいの？」
「了！」
「問題なし」
　二名の軍人と僕が返事をする。神月さんは力強く頷くと、僕の方を見た。
「一之瀬恭、道中、他にアーリはいる？」
「もう感じない。確約は出来ないけど……凄い強い力をあのビルから感じるだけ」
　あのビル。一際高いビル。そこに恐らくアーリのボス、僕の父親がいる。
「……それじゃあ、行きましょう」
　尋、須永中尉、僕、神月さんの順に並んで、警戒をしながらビルへと向かった。
　全てを終わらせるために。

２７

　途中でアーリの襲撃にあう事もなく、目的のビルに着いた。狙撃されたビルから２キロもないのに、精神的にはかなり消耗していた。気を抜けなかったのもあるがそれ以上に、嫌な感じがするからだ。口には出し難いのだけれど、何かどす黒い嫌な気分になる、そんな感じがする。
「一之瀬恭、ここ？」
　神月さんも心なしか顔色が悪い。
「多分……ここの、上の方だと思う」
　ビルを見あげる。
「俺が先陣を切ります。中尉と研究員、きょ……一之瀬さんは、後に続いてください」
　尋が素早く中を確認すると、体を滑り込ませた。ＭＩＮＩＭＩを持った須永中尉も続く。僕はライフルに弾を装填して、セフティをかけた。それを見た神月さんもガバメントのスライドを引き、安全装置をかける。お互いに顔を見合わせ、無言で頷いた。ビルのドアは開きっぱなしだった。中は薄暗く、そして妙な寒気がする。
「……クリア」
　無線で尋の声が聞こえる。僕達はそれを聞きながら進んでいく。階段を上っていく。部屋をいちいち探ってる暇は無い。なので、僕がしんがりを務めた。後ろからアーリが来た場合、とてもじゃないが神月さんが戦えるとは思えないからだ。
　クリアリングを繰り返し、どんどん上へと向かう。一階ごとに自分の血が騒ぐのが分かる。
――ほら、もうすぐ感動のご対面だぜ。
「黙れ」
――流石に力は貸せねーな。お父上だからな。

「邪魔をするな……」
――なんだよ。つれねーな。ほら、残りの三人を殺して、アーリとして生きようぜ。天国だぜ？
「うるさい！」
　胸を押さえながら階段を上って行く僕を、神月さんが不安そうに振り返る。
「一之瀬恭、大丈夫……？」
「なんとか……ね」
　大嘘だった。体が熱い。頭が痛い。息が切れる。だけど、それでも、僕がやらなくちゃ。階段を上っているうちに感覚が麻痺してくる。それでも、三十階ぐらいだろうか。僕の勘が伝えた。
「……多分、このフロアにいます。集合しましょう」
「了」
　尋と須永中尉の声が無線越しに聞こえた。二人はすぐに下りてきた。顔には緊張と不安、そして決意が見てとれる。
「行きましょう」
　神月さんが促す。僕が先頭に立つ。大きな部屋が向かい合って二つあるだけの階だった。会議室として使われていたらしい。
「……右のドアです」
　僕がそういうと、ドアの左側に尋、右側に須永中尉が立つ。アイコンタクトで、尋がドアノブをひねると、須永中尉がドアを蹴って開き、素早く二人が入り込んだ。
「動くな！」
　声が聞こえたのを確認して、僕と神月さんも入る。そこに、そいつはいた。
　大きさは人間と同じぐらい。服は薄汚れた白衣。黒髪。そしてその顔は僕と似ていた。決定的に違うのは、真っ赤な目。そして右手に長い抜き身の日本刀を持っていた。刃渡りだけで一メートル以上あるように見える。
「……はじめまして。息子と、そのお友達」
「ふざけるなよ……」
　僕が悪態をつく。父親の声はやはり僕に似ている。だが、その軽薄な笑みは見るものを不快にさせる。
「私を殺しに来たのかい？」
「その通りだ！　他のアーリを消滅させ、抵抗しないというなら殺しはしないが、そうでないなら、撃つ！」
　尋がダットサイトを覗きながら言う。須永中尉もＭＩＮＩＭＩを放さない。二人ともセーフティは切っていて、後は引き金を引くだけの状態だ。
「では、交渉決裂だ。死んでもらう」
　言いながらアーリのボスは日本刀を振りあげながら、真っ直ぐに迫ってきた。
　百メートル四方はある、がらんとした大きな部屋の中を真っ直ぐに。
「くそっ！」
「撃ちます！」

　尋と須永中尉が銃を撃つ。連続する火薬の破裂音。だがボスは、弾丸全てを何事も無いように刀で弾いて防いだ。
「なっ……そんなことって！」
　その芸当に一瞬思考が止まったが、直ぐにＭ４Ａ１を構えて、撃った。ダットサイトを覗いて、赤いポイントを胴体に合わせてフルオートで撃つ。火薬音が連続して響く。が、それを素早く避けて距離を詰めてきた。日本刀を振り上げて迫るボス。振り下ろされる鋭い刃を、僕はライフルで受け止めた。
「この速度に反応できるとは。さすが息子」
「息子って……言うな！」
　僕は思いっきり胴体にキックをした。ボスの体が少し後ろに下がる。アサルトライフルはかなり深くまで切り裂かれていた。もう銃としては使えないだろう。それを投げ捨てると、僕は左手で腰のグロックを抜いた。間近に見える体に、ありったけの弾を撃つ。腹部に数発着弾した。しかし。
「拳銃弾で私が殺せるとでも？」
　噴出した血液は直ぐに止まった。アーリの再生能力だ。みるみる傷口が塞がっていく。
「一之瀬さん、伏せて！」
　須永中尉がボスの後ろからＭＩＮＩＭＩを撃った。二百発装填されている弾薬入れを撃ちつくすぐらいに。放たれた弾丸は腹部が切り裂かれるほど着弾した。それでも撃つのをやめない。弾が切れたのか、やがて音が止むとアーリの親玉は胴体がズタズタになっていた。
「やった……か？」
　ピクリとも動かない親玉に、ＭＩＮＩＭＩを置き、ガバメントを抜いて慎重に向かっていく須永中尉。僕の血の騒ぎも少し治まってきた。本当にこれで終わりなのだろうか？
　だが、次の瞬間、それは裏切られた。
　一瞬だった。上半身だけを起こして、ボスは刀を突き出した。須永中尉の胸部に、刀が深く刺さっていた。
「……あれしきで死んだらアーリの親玉は務まらないよ」
　口から血をこぼしながら、それでも親玉は立ち上がる。そして、突き刺した刀を捻る。血が噴き出す。
「ぐっ……あっ……」
　須永中尉。ヘリコプターでドアを閉めてくれた。僕の不安を少しでも減らしてくれた。いつも冷静。頼れる人。僕は叫んだ。
「中尉！」
「……あと……は……よろしく……お願い……します……」
　それだけ言うと、彼の目から光が消えた。体から刀が抜かれると、糸が切れたように地面に倒れた。
「お前……お前！」
　僕の中が騒ぐ。アーリの血を無理やり呼び覚ます。いや違う。抑えていたのを解放しただけだ

。「俺」は出なかった。隠れているのか、消えてしまったのか。
「流石にダメージを受けたよ。やれやれ」
　親玉のその言葉に僕はＭ５００を抜くと、二発撃った。当たったところが大きくえぐれ、まるで大きな口で食い破られたようになる。そのまま近付くと、僕は思いっきり横蹴りを叩き込んだ。
「恭！」
「一之瀬恭！」
　尋と神月さんが声をあげた。しかし、もう耳に入らない。もとよりこれはアーリ同士の殺し合い。人間の限界を超えている。振り下ろされた日本刀を左手で受け止める。グロックを持った左手が切り落とされた。激痛。しかし、また直ぐ僕の左手は再生した。右手で至近距離からＭ５００を三発叩き込む。向こうの体が大きくよろめく。僕はナイフを抜くとＭ５００を投げ出した。リロードする暇も無い。
「あれはあんたの銃だったんだ！　あんただって、あの銃で守りたいものがあったんだろ！　母さんや、皆を！　なんでアーリのボスなんかしてるんだ！」
　言いながら、ナイフを首筋に突き刺した。吹き出る鮮血。
「人間は悪意の塊だ！　アーリこそが人間のあるべき姿、そして唯一生きるべき生物なんだよ！」
　僕の胸を日本刀が貫く。
「ふざけるな！　人間は、今だって戦ってる！　生きるのは戦いなんだ！　それに負けた自分を正当化するな！」
　予備のシースナイフを胸部に突き立てる。
「青臭いことを言うな！」
　刺さっていた刀を抜かれた。血が吹き出る。
「アーリは空が青いと嬉しいか？　太陽が暖かいと幸せか？　笑顔を見ると、優しい気持ちになれるのか！」
　空いた左手で殴る。
「知ったことじゃない！　それに私が死んだところで、お前という存在があるなら、また元通りだ！」
　同じく、左手で殴られた。そうか、僕がいるとまたアーリが……。
　お互いの体が刃物でズタズタになっていく。刀とナイフの当たる金属音。肉が裂ける。周りが血だまりになっていく。
「一之瀬恭！　もうやめて！　死んじゃう！」
「恭！　撤退しよう！」
　今更撤退なんて出来ない。でも、僕の体が動かなくなってきているのも事実だ。二人の声が遠くなる。少し血を流しすぎたかもしれない。
「くそ、僕は、こんなところで死ぬのか……？」
　周りが白くなっていく。光に溶けていく。もういいじゃないか。このまま倒れたら、どんなに

楽だろう。しかし、消えていく思考の中、僕は確かに見た。僕の街。戦う軍人。木村さん。母さん。クラスメート。山のようなアーリの死体。
――少年との約束だ！　絶対この街は死守するぞ！
　駐屯地で会った少尉さん。
――さぁ、今日は記念日だ！　銃も弾もタダだ！　だけど、その代わり死ぬんじゃないわよ！
　木村さん。
――恭は必ず帰ってくる！　その時に家が無かったらあの子が悲しむ！
　母さん。
――あいつだけに美味しいところもってかれてたまるかよ！
　クラスメート。
　皆、戦っている。武器を手に、戦っている。諦めないで、戦っている！
　僕も……まだ、戦える！
　僕は倒れかけた体を奮い起こした。手榴弾のピンを抜く。これで手榴弾はレバーを動かすだけで爆発する。それを胸に抱えたままタックルをした。賭けだった。体格も力も僕が劣っている。だけど、やるしかない。いや、今の僕ならできる！
「くらえ！」
　渾身の力を込めたタックルは、ボスの体を大きく後ろに吹き飛ばした。成功した！
　倒れたボスにレバーを動かした手榴弾を投げ、素早く後ろに下がり、距離をとった。破片手榴弾の殺傷範囲は広い。ものすごい爆発音がした。ビルが歪んだのだろう、コンクリートが軋む音が聞こえ、瓦礫が振ってくる。だけど、気にしている場合ではない。爆発点に連続して焼夷手榴弾を二個とも投げる。
「骨まで燃え尽きろ！」
　火炎が広い部屋に広がる。アーリの楽園が炎に包まれて燃えていく。
「やった……か？」
　尋が呟くのが聴こえた。
「いや、まだだよ……」
　僕には分かっていた。まだあいつは生きている。感じる。悪意を。あいつは笑っている！ 瓦礫をかき分け、炎に包まれながら、それでも立ち上がった影があった。僕はナイフを握りなおし、突進する。炎で爛れた体。その心臓部に、ナイフを突き立てた。影が大きく歪む。
　「これで終わりだ！」
　最後の手榴弾のピンを抜いた。レバーを動かし、思い切りぶつけるように投げつけた。バックステップで大きく離れる。大爆発と共に飛び散る破片。驕りすぎた人間を粛清する裁きの炎。僕は床に伏せ、尋は神月さんを守るように覆いかぶさる。終わった。ボスを倒した。だけどもうビルは長く持たないだろう。僕は崩れゆくコンクリートと燃え盛る炎の中、立ち尽くした。
　まだだ。まだ止めをささねばならない。いずれ再生しないように、完全に息の根を止めなくてはならない。僕はゆっくりと近付いた。かつてアーリのボスだったものは、今や小さな肉塊と化していた。それはあまりにも惨めで、無残で。父親だったのに、もう何の感情も浮かばない。

「……さよなら、父さん」
　他の武器を失った僕は胸ポケットからワルサーＰＰＫを取り出すと、スライドを引き弾丸を装填して、三発、肉塊に撃った。命中すると、それは灰になった。その瞬間全てのアーリが、生きているアーリも死んだアーリも、全て断末魔と共に灰と化した。いや、化したのだろう。感覚で分かる。僕の体の血が苦痛に叫んでいるからだ。
　無線に通信が入った。
「成功です！　全てのアーリは消滅しました！」
　興奮した声。これはヘリのパイロットのものだろう。
「聞いたか！　早く脱出しよう！」
　炎に包まれ瓦礫が落ちてくる中、尋は僕に手を伸ばした。だけど、僕はその手を握らなかった。いや、握れなかった。
「一之瀬恭……？」
　神月さんが不思議そうに僕を見る。
「まだだ。まだアーリはいるよ。まだ……一人だけ、最後に残った、アーリが」
――な、お前！
「君ともお別れだね、「俺」」
――やめろ！　お前は王になれるんだぞ！
　アーリの王？　そんなの。
「そんなの、まっぴらごめんだよ」
　僕は自分のこめかみにＰＰＫを当てた。
「恭！」
　僕が何をするか、どうやら気付いた尋が声を張り上げる。
「神月さん、高遠さんに銃を返せなくてごめんね、って伝えて」
「バカ言わないで！　私をパシリに使うんじゃないわよ！　自分で言いなさいよ！」
　神月さんが泣きそうな、それでも毅然とした顔を浮かべた。できればそんな顔を見たくはなかった。いや、見るんだったら他の場所がよかった。
「ごめん……ごめんね」
　僕は銃を頭に向けたままそう言った。ただ謝ることしか出来ない。他に方法は無い。
　ごめんね、高遠さん。ごめんね、神月さん。ごめんね、尋。ごめんね、母さん。ごめんね、皆。
瓦礫が崩れてくる。大きな破片が僕と尋、神月さんを隔てた。これでいい。これでよかったんだ。
「神月研究員、もう逃げないと、俺たちまで死にます！」
「一之瀬恭！」
　尋が神月さんを引っ張っていくのが見えた。尋なら安心だ。きっと、あの二人なら立ち直れる。
「それじゃあ……もう、物語を終わらせないとね」

　僕は、引き金に力を込めた。

２８

「一之瀬君の嘘つき……」
　私が街でアーリに震えている間、ずっと一之瀬君の事を考えていた。街で皆が戦っていた。私は何も出来ずに、家で怯えていた。だけど、ある時、アーリが全て灰になった。人間が勝ったと、皆が歓喜に沸いた。私も嬉しかった。アーリの司令官を一之瀬君が倒したんだ。これから、私は一之瀬君と一緒にいられるんだと思った。
　だけど、一之瀬君は帰ってこなかった。
　ポストにただ一通の手紙だけを残して。そう「行ってきます。必ず帰ります」とだけ書かれた手紙を。そして、私の家に来た軍人さん、前に学校で会った軍人さんが、凄く辛そうに一之瀬君の話をしてくれた。崩れ行くビルの中で離れ離れになったこと。そこで頭に銃を突きつけていたこと。それでも、銃声は聞こえなかったこと。ビルの中から遺体はみつからなかったこと。そして、他にも色んなことを。
　神月さんはあれ以来学校には来ていない。なにやら凄く忙しいみたいだ。
　教室に空の席が二つ。そして、二週間が過ぎるころ、一之瀬君の机はいつしか消えてしまった。一之瀬君のいない私の中は、からっぽになってしまったみたいだった。
「美野里、少しぐらい散歩でもしてきたら？」
「……うん……」
　あの日以来私はあまり外に出なくなってしまった。それを心配してお母さんが声をかけてくれた。外行きの服に着替え、小さなバッグを持って外に出る。もう、春だった。風とお日様が気持ちいい、と普段の私なら思っていただろう。一之瀬君のいない世界。アーリのいない世界。新しい世界。だけど、私は嬉しくなかった。一之瀬君がいない世界は、色を失ったかのようだった。私はベンチに座り込む。桜が散っていく。それが、なにか物悲しかった。座って、ずっと散っていく桜を見ていた。日差しが温かい。いつしか私は眠り込んでしまった。
「高遠さん、約束、遅くなってごめん。やっと戻れたよ」
　気付けば私の横には一之瀬君がいた。嬉しかった。例えそれが幻だとしても。
「一之瀬君、遅いよ。亡くなったと本気で思ったんだから」
　私は驚かない。これはきっと夢なのだから。だけど、今だけは夢でもいい。一緒にいたい。
「銃、返しにきたよ。アーリはもういないけど、護身用にはいいんじゃないかな」
　そう言って彼は私の膝の上に銃をのせると、立ち上がった。
「それじゃあ、またね」
「どこへ行くの？」
　私が訪ねると、彼は笑顔で何かを言った。けれど、強い風にそれはかき消されてしまう。
「待ってよ！　聞こえなかった！　ねぇ、もう一度言ってよ！　ねえ！」
　彼はそのまま振り返らず、どこかへ行ってしまった。桜吹雪に溶けていくように、光の中へ消

えていく。
「一之瀬君！　……あ……れ？」
　そこで目が覚めた。私は泣いていた。眠りながら泣いてしまうなんて、子供みたいだと思う。私は目を擦った。その時に気付いた。膝の上に、ＰＰＫが置かれているのに。
「一之瀬君……？　一之瀬君なの？」
　辺りを見回すけど、誰も居なくて、さっきのは夢なのか、現実なのかも分からない。でも、なぜか分かる。そう、きっと彼は生きている。
私は銃をバッグにしまうと、立ち上がった。アーリのいなくなったこの世界。今は街の外へも簡単に行ける。探しに行こう。きっと一之瀬君はどこかにいるんだ。彼のことだ。空を見に行ったのかもしれない。ここじゃないどこかに、もっと綺麗な空を。

　確かにアーリは悪意から生まれたのかもしれない。だけど、一之瀬君はそれをねじ伏せることが出来た。人間には可能性があることを彼は証明してくれた。それに一之瀬君は「さよなら」じゃなく、「またね」って言ってくれた。
　やろう。私は、一之瀬君を探しに行こう。大丈夫。私にだってきっとできる。

　私は、どこまでも続く空の下、桜が舞い散る中を街の外へ向かって歩き出した。

〈了〉